

小田原史談

第 196 号
発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内TEL(24)0637

お正月のこと

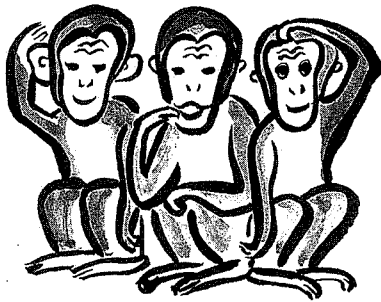
市川 一郎



私の生まれ育った家は小田原市上曾我で、江戸時代から明治始め科学染料が輸入されるまで紺屋(藍染)をしていた、古い仕来たりを守って来た家でした。
元日 朝父が最初に起き出し、真新しい禪一つになり井戸端で、釣瓶井戸の水(深井戸で水温は年間十五℃ぐらいでした)を

頌春

平成十六甲申年



内田美枝子 画

汲み上げ、頭から被って身を清めお祈りをしてから、歳神を始め神々にお供え物をしてから、お雑煮を作り朝食の準備をしました。家族が起きて揃うと父がお祝いの言葉を言ってから朝食を済ませ、子供達はお歳玉を貰いました。朝食の準備は十二支の卯の日迄続きましたので、父の行事は年によって長短が有りました。
二日 夕食は毎年とろろ飯で、長芋を山葵で刷り、すり鉢にいれ、すりこ木で刷るとき、その淵を抑えるのが子供の仕事で「しっかり」抑えないと、すり鉢が動き出すので、父に叱られました。
四日 朝門松を倒して置くと子供達が集めに来ました。仕事始めといつて田畑や山仕事を今日から始めました。
五日 「ごかんちち」と言っていて、仕事は休みました。宮中祝宴の為でしょうか？
六日夜 母が集めた春の七草を、木鉢に組を渡しこの上に載せ、隣の家の堺にあつた「とねりこ」の直径二、三cmぐらいの枝を三十cmぐらいに切り、良く洗い「削りかけ」と言つて前周を幅約二cmで長さ十cmぐらいに落ちないように順次けずり、箒の様なものを数本作り、此れと菜切り包丁の峯で組に載せた

七草を「ななくさなずな、とうとのとりと、にほんのとりと、つるんではたばた」と調子を取りながら、歳神様の下で夜叩きました。
七日 昨夜叩いた七草を細かく切り、所謂七草粥をつくり神様にあげて、家族の朝食にしました。
十一日 今日「鏡開き」と言つて、お供え(鏡餅)を下げお汁粉を作り神様に上げるのですが、硬くて切れないので馬の飼葉を切る「おしぎり」で切りました。
お正月に必要な物は年末に出して置き、蔵開きと言つて此の日まで蔵や物置の戸を開けないようにしました。
十四日 米の粉で繭玉、小判、軍扇、団子等いろいろな物を作り、櫛の木を薪の束の中に差し込み、その小枝に取り付けました。他に「さいとうばらい」を焼く分を準備しました。
十五日 赤飯を炊いて神様にあげ、家族も食べました。
二十日過ぎ この頃一人は烏帽子を被り長い袂の着物で袴をはき扇子を持ち、一人は大黒頭巾をかぶり裁着袴を穿き、鼓を持ち「新年おめでとう」と言いながら座敷に上がり、神様の前で鼓を打ち二人でお祝い言葉を掛け合ひで言いながら、座敷中

を踊り回りました。一頻り過ぎたところで改めて新年の挨拶を交わし、茶菓を出しご祝儀を差し上げました。昼時は食事を出りました。母が「三河の国の万歳で、扇子を持っている方を太夫と言い、鼓を持って居る人が才藏で正月始めに国を出て、決まった家を順に回って来るので今頃になるのだ」と教えてくれた事があります。

二月一日 歳神様始め神々や家の各入り口の飾り物を下げました。

二月初午の日 隣家に在るお稲荷さん(当家のものと伝承されています)に苞(稲藁を中央で結び二つ折りにして船型にしたもの)に赤飯を盛り南天を添え菓子等をあげ、近所の家三軒がお正月の飾り物を燃やし、集まった子供達は菓子やお握りを貰いました。

子供の正月

私は竹の内と言う家数が二十五・六軒の窪で育ち、「おこまち」と言う月一回行事(後述)があり、尋常一年で入り、高等二年(現在の中学二年)で餓鬼大将となり退会する仲間に入りました。

四日 仲間で窪中の門松を集め、山の中腹に在る歳の神(道祖

神)さんの所に引き上げ、大人に手伝って貰い、歳の神さんを中心にして六畳ぐらいの雨露の凄げる小屋と火を燃す穴を作り、山から集めた枯れ木を燃やして暖をとる、夜遅くまで遊びました。

お祭りの時に用意した鬼の面やおかめの面をかぶり、太鼓と拍子木を叩き、御幣を振り回しながら「歳の神さんすこんこん、なごやの〇〇から来た福の神」と言いながら家に入り、

各家に上がり「お家は繁盛、悪魔払い」と言いながら座敷中を踊り回ると小さな子は泣き出しました。此のような家ではお賽銭を早く出されました。十三日までに二回ぐらい回りました。

十日頃 窪中で竹林をお持ちの二軒の家から隔年に尺竹(直径約九〇)「御神木」を貰い、鉄道線路に近い「さいとうばらい」をする道端に運び、門松の竹を左右に並べ根元を縛ってこれを御神木の中央から少しに結び付け、そこに去年婚礼のあった家から扇子を貰い、三本を開いて丸くし、「おかめ」の面と共に

取り付け、竹の両端に燈を縄に付けてつり下げ、竹の両端を縄で御神木の上に適当に絞りに上げ、杭に縛りつけ縄を三方に張って倒れないようにし、回りに門松を積みました。

十三日 此の夜は子供達は歳

の神さんに泊り込み、夜明けと共に小屋を壊し山の上から「さいとうばらい」をする所に運び、積み上げる事になっていました。

十四日 普通ですと学校から帰ってくる、繭玉と書き染めを持って「さいとうばらい」に行き、団子を焼き、書き初めが高く燃え上がると字が上手くなると言うので、少しでも高く上がるよう念じて燃やしました。

やまつせい

私が十二・三才の時と思いますが、十四日朝の三時ごろ小屋の外に出た者が「おうい御神木が無いぞ」と叫びました。皆んなで四方八方を探しましたが、見当たりませんでした。ただ鉄道線路にお注連が少し落ちていました。

小屋に帰り「やまつせい」をやることになり、素縄で歳の神さんを上から下迄隙間無く縛り、青竹で「御神木を盗んだ奴やまつせい」と言いながら皆で竹が籠に成るまで叩きました。

後日話

一、竹の内の窪には毎月十五日に「おこまち」と言つて子供達が各家を回り、お米一合かお金を貰い、餓鬼大将の家で赤飯のお握りと煮しめ等「おかず」に成る物を作って貰い、歳の神の上の三島神社で遊び事をしながら食べる習慣がありました。

その年の五月頃と覚えていますが、高台の今年御神木の竹を貰った徳田繁次郎さん宅に「おこまち」で行った時、お婆さんが「内のお爺さんが指を怪我して治らないので、易者に見て貰ったら「子供の祟り」があると言われました、その時お爺さんが「孫の子守で歳の神さんに行った時、縄で縛ってあるので「かわいそう」だと思い、縄を少し解いた時気分が悪くなり止めた」と話されたそうです。それで子供達に「歳の神さんに謝ってくれ」と言つて五十銭お賽銭を頂きました。

「おこまち」の支度をしてお宮さんに行き、直ぐ下の歳の神の縄を解き、綺麗に洗ってからお賽銭を上げ子供達全部で「繁あん」の疵が早く直るよう手を合わせてお願いをしました。翌月「おこまち」で行った時怪我が治ったと喜ばれました。

二、御神木を盗んだらしいと、噂の立った人は翌年亡くなりました。

以上子供の頃の思い出をくどくどと並べて見ました。(終わり)

市川さんは一月六日で一〇二歳になられます。現在、本誌に寄稿された今までの記事を集成大成する毎日を元気で送っておられます。(編集子)

申年生れの話

近^{きん}賀^が喜久男^{きくお}

私、大正九年九月三十日生れ年男の申年の八十四才であります。

生まれ、育ちは静岡ですが、昭和三十二年頃から、三十五年ほど小田原鈴廣に経理畑を中心に、勤務してきました。

当時小田原の蒲鉾屋は「籠せい」「まるう」「鈴廣」他十四店の順で、小さな店でした。

正月、おせちの準備になる頃の繁忙期は何でも手伝いました。今のように冷凍技術や物流システムのない時代ですから、

正月のための仕込み(原料手配は勝負であったし、原料も加工品も生ものとして扱うわけですから、大変な神経を使いました。

原料の白身の魚は東シナ海で捕れ、焼津港に水揚げされたのでした。最初の頃は何も加工しないものでしたが、のちに頭を落とした姿で来るようになりま

した。現在では、冷凍のすりみで世界各国から来るようです。板は静岡の島田から送られて来る櫛の加工品でした。

年末の二十日頃からおせち用の製造に入りますが、二十四、

二十五、二十六日あたりが出荷のピークで主に築地の仲買人へ送り届けます。そして、元旦には新鮮な蒲鉾が一般消費者の食卓にのると言う訳です。

正月は元旦のみ休み、二日、三日は出勤して初荷や追加注文に応じます。

当時の楽しみはまず大学駅伝、その応援にオリオン座(当時の中継所)にお店の子供達を連れて見に行く事でした。

やっぱり暮れやお正月の雰囲気は商店が一番ですね。

さて史談会との関わりは、拙宅の隣りの前会長の山口様より入会のお誘いがあり、私も歴史が好きでしたので早速平成七年度より会員となりました。最初は曾我の郷史跡めぐりでした。

その後平成十年妻が脳血栓で倒れ入院し、入院生活六ヶ月で退院し自宅療養となりましたが、平成十四年二月、七十六才で歸らぬ人となりました。その間介護等にて史談会の行事には全部欠席致しました。

妻が亡くなり、その当時は炊飯器、洗濯機の取扱いかい

ろいろ家事の煩雑さを身を以て経験し、伴侶を亡くした男の辛さをしみじみと感じて、生きることへの望みを失いがちになりました。そういう時、地域の皆様、知人、友人の暖かい励しをいただき、少しづつ元気を回復し現在に至っております。

皆々様に生かされている以上、健康で過ぎなければならぬと思ひ、健康に関する情報を詰め込みましたが、情報過多で今では一部だけ実践しております。食事も結局なんでも好き嫌なく喰べることが良薬と思ひ、神経質にならず食しております。酒は年令的に衰えておりますので自然に量は減っておりますが少々嗜む程度です。問題は一番悪いとされるタバコです。これは意志が弱いので仲々止められませんが。現在は節煙の状態です。これからの目標ですが、本年が妻の三回忌ですのでこれを済せ、次の七回忌迄は自分で仕切り、あとは息子に任せたいと思っておりますので、後最低でも米寿迄お迎えが来ないよう頑張る所存です。

一九六号(平成十六年一月号)	目次
お正月のこと	市川一朗……………1
申年生まれのはなし	近賀喜久夫……………3
昭和十四年 商家の元旦	田中 豊……………4
猿との出会い	田中鏡子……………5
道祖神太鼓の思い出	井上忠義……………6
二宮金次郎の正月出奔	青木良一……………8
私と映画、戦中戦後の少年時代	植田博之……………10
私の青春 ⑭	続 京都練習飛行隊と終戦 菅沼 博……………12
植田又兵衛先生と小田原水道 (早川上水2)	石井啓文……………14
尾崎亮二 十一	小田原城廃城 後の変遷 岡部忠夫……………18
元旦の朝、若水を汲む	石井啓文……………21
酒匂史談 ⑯	川瀬速雄……………22
文名西堤の謎を追う(その二)	内田 清……………24
会からのお知らせ	語り部の会 企画展……………26
史跡めぐり奈良方面……………27	大雄山三門落慶に参席……………28
新刊紹介、新会員紹介……………29	

昭和十四年 商家の元旦

田中 豊みのる

未だ夜の明け染めぬ闇の中、井戸ポンプのきしむ音が夢の中から徐々に近づいて来る。伊勢松坂で和菓子舗を営むわが家では当主が元旦、歳の初めの一の行事として若水を汲む音であった。父は昨夜半、終夜運転の近鉄で伊勢神宮に年越し参りに出かけたが、後で聞けば伊勢神宮は戦勝祈願、武運長久を願う人の群でごったがえし憲兵が騎乗で軍刀を抜き群衆整理にあたっていたとか。

夜明け迄にはまだ間がありそ

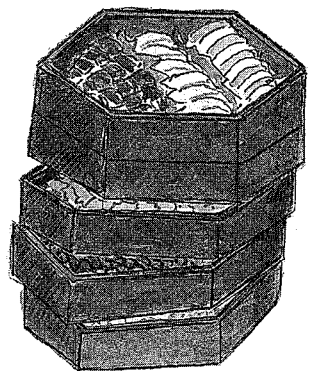
う、夢心地の私の枕元にはほんものそっくりの背囊(兵隊の背負い鞆)、弾装(ベルトのついた弾丸入れ)が置かれている。きつと日頃から器用な番頭の「大さん」が昨夜のうちに置いてくれたのだろう。これまでも軍刀や銃を作ってくれ戦争ごっこする私の自慢になっていた。「豊! お前も早く!」と父の声にもう寝てはいられない。父にうながされるまに祖父に助けられながら井戸の柄を懸命に動かし、真新しい手桶に今年初めての水を汲んだ。



父に誘われ氏子神の八雲(やぐも)神社に初詣、その頃の冬は身が切れる程寒かったが、柏手を打つ音が冴えた空気を切りさきこの日ばかりは新鮮な気持ちにしてくれた。行き交う人々と父がかわす「おめでとーございます。旧年は...、本年も...」の挨拶の声も華やいでいた。帰り道の街の家々には浅黄の家紋を染め抜いた幔幕が張られ、軒先の雁木(がんぎ: 町家の軒先の庇)には「長じめ」が掛け巡らされ、入り口が朱房で絞られ、その奥に門口を一年中飾る「門じめ」が覗いている。わが家でも私達が帰宅する頃には店の人によつて幔幕が張られ正月準備は万端である。父が神棚、竈(くど)の荒神さんと仏壇に灯明をあげる。神棚には「かつぶし」といわれるお飾りが暮れの三十日に祖父の手で飾られ、和紙の御幣の白が清々しい。

灯明を上げ終わるのを待ち番頭・職人・女中さん(この頃より職人が一人、二人と召集をうけ抜けていった)を含め一家全員(十二〜三人)が集まり、祖父・父・長男の私・祖母...としきたりに従い朱杯がまわされ雑煮を祝う。餅は焼いた角餅、鶏肉(かしわ)・椎茸・大根・里芋・人参・京麩に青菜を浮かべ、へぎ袖が添えられたすまし汁仕立てであった。食べる餅の数を競い合い賑やかなこと...、

給仕の母や女中さんは食べるひまもない。餅と言えば餅つきは、暮れの二十八日、夜も明けやらぬ四時頃から一家総出の恒例のイベントだった。つき手は店の衆、手がえしは母や女中さん、つきあがった餅を「お鏡」や「のし餅」にするのは父の役目、私達子供は、はしやぎながら半づきの餅をもらつてはほほばり、餡やきな粉、おろし餅になる頃は腹はくちくちなっていた。お節は暮から母が煮た物が多く、緑漆の亀甲のお重に五段ばかり、芋や筍・黒豆等の煮物よりツイツイ煮(はぜ)を忠にした昆布巻や伊達巻・蒲鉾に手が伸びてしまう。はんべん(扇状)になつてゐることから「しがみ」と言つた)等も人気があった。



祝膳が済むとわが家恒例の福引である。凝り性の父が練りに練つた品物が並び、どんな物が当たるかワクワクして固唾を飲んだ。次々と紙縋りを開き父が楽しんで書いた文句を披露、品物が渡される。「赤い腰巻」や「丸髻の

「芯」等が混じり、当たった職人達の困った顔にドツとあがる笑い声、嬌声……。何故かいつも祖父母には鍋セツト、私には好物のシユークリームが当たるのは何か仕掛けでもあったのだろうか。

福引が終わると祖父母と父から「お年玉」が渡される。当時は小遣いを貰うのは夏祭り(松坂でも祇園と言った)・山の神(道祖神)と正月の年二三回(誕生日は正月に歳が上がるので何も無かった)で、

猿との出会い

田口 鏡子

もう十年も前の事です。

平成のはじめ頃、入生田は春日局の墓の参道脇にある蜜柑畑あと地の、ささやかな畑を手に入れました。

無農薬の野菜を作つて、日頃の運動不足の解消にもと、希望に燃えて、早速汗水たらして、畑を耕し堆肥を敷いて、ジャガイモの種をまき、さつま芋の苗を植え、育つのを楽しみに待つていました。

ところが、どうでしょう。

まだ十分に育たない芋を、猿たちが、一面ほじくりかえし、根が少しでも太くなっているものか食べちらかして、すつかりだい

和菓子屋の關係か買食いを強く禁じられ、せつかくのお年玉も使うことなく貯金をさせられてしまう。番頭さんには羽織・着物・草履、若い人は木綿の着物・下駄、それぞれに祝儀と土産が渡された。これらを携え三々五々、半年振りに父母待つ故郷に飛んで帰るのである。

小学生の子供たちは普段着られぬ「よそゆき」に着替え登校、フロックコートに身をつつんだ校長の

なしです。

うわさには聞いていましたが、これほどとは思いませんでした。

その後、大根は辛味があるせいか、被害を免れましたが、里芋も荒らされました。

翌年五月のある時、もう猿の食料供給のための畑仕事をあきらめていましたが、畑の雑草がご近所に迷惑を掛けていないかと、夫と二人で、草取りに出掛けました。案の定大きく伸びた草を抜いていると、何時の間にか、一、三十匹の猿の群が、ボス猿を先頭にやつて来ました。じわじわこちらの畑へ近づく様子なので、「しめしめ、この際、痛い思いをさせ、二度と畑へ来ない様に懲らしめてやる」と、日頃の鬱憤ばらしも手伝つて、夫にならつてそこらにある石を拾い集め、猿たちに向かつて夢中で投げました。

訓話もそこそこに、国旗の焼印をおした紅白の饅頭(わが家はお茶の菓子を中心に扱っていたので珍しく、うれしかった)をもらつて飛んで帰ると、陳列には父が徹夜で作つた「干菓子の御所車」が三宝にかざられ、店先には金屏風を立て緋毛氈が敷きつめられ志摩から届いた伊勢海老が鎮座すると鏡餅と共に行器(ほかい・食物を盛つて他所へ運ぶ蒔絵の容器)が置かれ、茶釜の湯がたぎっていた。早い

ところが猿たちは泰然自若として逃げる様子もなく、

「同じ先祖の仲間同士で争うなんてやめようよ、何を興奮しているのさ」という態度で見下している様子です。あたふたしている自分の姿が、なさけない気がしましたが、何故か必死でした。

そのうちにボス猿も、いつもと勝手が違うと思つたのでしよう、子猿や、乳のみ子を背負つた母猿たちに撤退を命じたらしい。よりによつて、私は見さかしく、その引き揚げる群のうしろから石を投げたのです。

これは文句なくルール違反でした。うなり声でしょうか異様な低音のひびきに、ふと見るといつの間にかボス猿が屈強な若猿でしたがえて、まっ赤な顔を一層赤くして、私のすぐ近くまでせまつて威嚇しているのです。私は悲鳴

年始客に抹茶がふるまわれ話はずんでいた。表通りには晴れ着姿の人々が行き交い、獅子舞の笛太鼓の音が遠くに聞こえていた。

「正月つあんはエエもんや、赤いべを着てジョジョ(草履)履いて下駄のハマよな(齒の様)アモ(餅)食べて……」

昭和十四年、やがてヒタヒタとおし寄せる暗い時代を、予想だにしない平和な元旦であった。

(おわり)

をあげ、逃げようとはしますが、足がすくんで一歩も出ません。

そのとき、ボスは私との距離をそのままにして私に何かを訴えていたのです。

私は、私より一枚上手のボス猿に、畑のうらみ事などすつかり忘れて感謝しました。足をとられた私に、危害を加えようとすればできる位置にいた彼等は、真剣に怒つていたにもかかわらず、威嚇だけで手を出さなかつたからです。

さて、猿に借りをつくつてしまつてからは、我家の畑には、花木や猿の好まない野菜をつくつて、共存をはかつています。

その後、山に木の実のなる樹木を植えるなど、県や市による対策の結果、だいぶ落ち着いてきたようです。

開成町円中地区の正月行事

道祖神太鼓の思い出

井上忠義

ご紹介 佐久間俊治

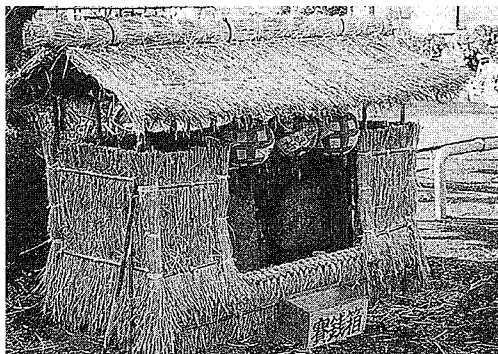
開成町中之名の井上忠義氏(八十九才)は、約三十年前、土地の子供達に道祖神太鼓のたたき方を教えた。その教え子の一人(今は四十才の会社員)が、覚えていた太鼓の楽譜を井上氏に書き送ったのに応えて、同氏が、円中(円通寺と中之名)地区の道祖神のあらましを記された。教え子からの楽譜メモを合せて、それをここにご紹介する。(写真は「開成町史民俗偏」より)

私は大正三二(一九四三年)生まれですが、子供の頃、道祖神は、中之名と円通寺の二ヶ所に祀られており、「さいの神様」とも呼ばれて疫病を防ぎ、無病息災、家内安全の神様として部落の人々から厚く信仰され、毎日お参りしている人もありました。お正月七日になると、上級生が中心となって部落から、わらや縄をもらい、細い丸太を借りて、三年生以上の子供達が入れる広



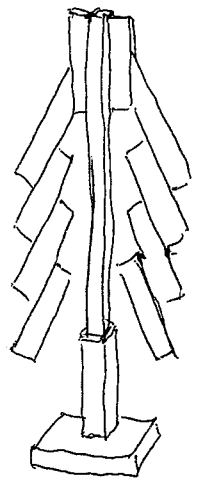
▲道祖神に奉納された必勝合格のダルマ

さの松小屋(注1)を、子供だけの手で造り、道祖神を小屋の中に入れ、炉端を造り、七日の夜から小屋に集まって太鼓たたきが始まります。また、時々、女竹(笹)の先に「ごへい」を付けて、「舞いこんだ、舞いこんだ。福の神が舞いこんだ。」と叫びながら家々をまわっておはらいをして、賽銭をもらい小屋に帰りました。これを「悪魔払い(アクマッパレー)」と言いました。病人のいる家があると、もらったお金で菓子を買って供え、病人の名前をさげびながら



▲セイノカミサンの松小屋(オカリヤ)

早く治るよう、青竹で道祖神の頭をたたいてお願いをしました。終るとお菓子を食べたり、餅を焼いて食べるのが楽しみでした。十一日は「そなえ割り(かがみ割り)」ともいう)とあって、神棚のお供えやしめかざりをみんな下げます。しめかざりなどはドンドン焼きで燃やすのです。お供えの方ですが、この日、子供は、もらったお金で小豆と砂糖を買い、ガキ大将(注2)子供組の頭をこう呼んだ)の家が宿となり、お供えを入れておしるを作ってもらい、夕方になると茶わんと箸を持って集まり、この日だけは食べ放題で腹一杯食べました。またこの日は「蔵開き」といって



▲御幣

蔵のある家では蔵を開けてお祝いをしました。いよいよ十四日になると、松小屋をこわして「ドンドン焼き」の場所へ積んで、子供が学校から帰るのを待って火をつけます。そこにはいろ／＼な物が高く積まれているので火は勢いよく燃え上がります。その時、書初めを燃やして高く舞い上ると上手になると言って喜んでいました。この時も太鼓を表に持ち出して威勢よくたたきました。夜になると屋台を引かします。この日はかりは大人が出て、屋台の準備をし、奉納酒を飲みながら丸太で棍取りをしてくれました。屋台に乗るのは、大太鼓一人、小太鼓三人、笛吹きとすり金各一人が乗って、にぎやかに太鼓をたたきました。子供は、姉さんか、お母さんの赤模様の長じゅばんを着て、たすきをかけ、鼻すじに白いを塗って屋台を引き、東は「四ツ角」、西は「ままた下のふるぎや」までの間を引き廻し、商店では、御祝儀をくれる店もありました。その後、

二宮金次郎の正月出奔

青木良一

一、きつかけは、「金次郎さん
はどんな正月を過ごしたのか
な」という思い付きからである。
全三十六巻の『二宮尊徳全集』
(復刻版 龍溪書舎発行)には膨大
な日記が収録されている。しか
し、この大部の全集は私の家に
はない。そこで、日記のなかの
金次郎さんに会ってしようと、
栢山の尊徳記念館の図書室を訪
ねた。

日記(第三巻)は、文政六年
(二八三)というから桜町領仕法の
二年目より始まる。その正月元
旦に「三ヶ村役人一同年始為御
祝儀御陣屋へ罷出」とあり、四
年ほど同じである。これは「陣
屋日記」であり公用の記録とな
るから、袴を着たような書き方
である。

文政十年(二八七)になると、書
き手が替わったのか、少し詳し
くなる。元旦に「御陣屋詰二宮
金次郎荒井新平月拝罷出候且村
役人一同為御拜罷出候事」とあ
り、三日には「二宮金次郎東沼
村廻り候事」で、正月早々の廻
村である。

読み進んで翌十一年になると

記事が多くなる。金次郎さんは
江戸から桜町への道中で正月を
迎えた。元旦の記録に「二宮金
次郎儀去月廿九日江戸表出立之
由「輕尻馬壹匹右之先觸同村主
殿名前にて到来」とある。何の
用事で師走の旅をしたのだろ
う。

そして、二日「二宮金次郎儀
今夜六ツ時過罷帰り申し候尤谷
田貝迄迎名主文蔵罷出候事」、三
日「二宮金次郎儀留守中書之内
村役人壹人夜小前貳人づ、罷越
候事昨夜罷帰り候付相止申候
事」。金次郎さんが留守をしたあ
とには、正月でも村人が帰りを
待つてやつてくる。

二、さて、文政十二年(二八五)の
こと。

正月元旦快晴

一、年頭為御祝儀三ヶ村役
人も一同罷出候付可申上

旨聞候事

一、蓮城院御霊前へ御代参
豊田正作相勤候事等

一、去暮東沼村弥兵衛横田
村百姓寸平御用向きにて

出府致候処今日帰村致候

旨申出候事

同二日天(気)

同三日天(気)

同四日天(気)

一、金次郎儀御用向有之今
日書出にて出府致候事

これには次のような註があ
る。「これより宮翁踪跡を失する
こと九十余日、終に成田の不動
にて尋ね當られ、新生の意氣を
以て現はれ来る」。

日記を追いながら、私はこの
「正月出奔」は意外だった。金
次郎さんが正月から九十日も失
踪したことがあったとは！とい
う驚きである。

「金次郎日記」(第三十五巻)で
は、このところは妻のおなみさ
んの手である。

正月朔日上々天き、東沼村
弥兵衛。横田村寸平両人、
江戸よりかへり候、村やく
人いちど御とうしうきにま
かりいで候

二日上々天き、平重まきは
り

三日上々天き、平十まきは
り

四日上々天き、二宮金次郎、
桜町文蔵、横田圓蔵、同村
寸平四人、江戸しふいたし

候、平重まき、り御めん被
下候

まきわり、まききりと出奔が

並んで書かれているのは面白い
ところだが、成田山に出掛けた
のはこのときだったのかと思
出した。

私が断片的な知識しかないと
は、小田原の人間にとつて金次
郎さんは近くて実は遠くに置
ておきたい存在だからである。
その理由は、金次郎さんの存在
が大きすぎて手に余るところが
あるのは勿論だが、金次郎さん
は小田原では神様になってし
まっていることもある。「柴刈り
縄ない」の歌を知らない者でも
なんとなく敬遠したのである。

それで「正月出奔」の事情を
知ろうと、さらに『二宮尊徳全
集』に当たってみた。桜町陣屋
日記(第三巻)、当座出入帳(第
十一巻)、金次郎日記(第三十五
巻)という「三部作」を見返し
ているうちに、全集の編集者の
解説が気になりだした。いや、
正直に言えば、解説を指針に中
味を眺めているうちに、自分が
解説者の目で日記を読んでいる
のが嫌になってきた。例えば「奸
佞」「奸民」「奸策」というタダ
ならぬ言葉が飛び飛びに出てく
るからである。これには、正義
を背負つてものを言うようで、
素直に読めない。

それでも記録を追う。金次郎
さんは出府費用として金貳拾貳
両銭八百文を所持し、村人三名

を連れて江戸へ向かった。しかし、江戸屋敷には現れず、金次郎さん一人行方が知れない。向かった先が成田山となる。

三、ところで、何故出奔したのだろうか。人によりいろいろ説かれるが、例えば『二宮尊徳』(守田志郎)は、「文政十年には横田大堰、高瀬橋の大工事、それに水利工事を多岐にわたってすすめていた。これはまことに強引というほどのすすめかたであった。そして同じ年にさきの出村禁止令である。こうした強引なやりかたは、望むところではなく、しかたなしにといったところであったろう。それが翌十一年の村民の小田原藩候への上訴となったのであろうか。思いつめての翌年早々の桜町出奔である」と述べる。そうかもしれない、そうでないかもしれない、肝心のところだが、いま私には何とも言えない。

かを求めてみたい」(『二宮尊徳』)。現代的な考察である。

金次郎さんの思考の先に何が あるのか。仕法を推し進められない原因は村民にも同僚にも小田原藩にもあるだろうが、金次郎さんにも原因があっただろうと考えるのが自然である。それを金次郎さんがどう自覚したか。身分のタガがまだ外れていない時代である。身分を実感しにくい現代で金次郎さんの思案を想像するのはなかなかむずかしい。また、「五石二人扶持名主格」は、士分といえず農民のままともいえない。なんとも宙ぶらりんだ。金次郎さんはこのあたりで、宙ぶらりんの真ん中に座り込む覚悟を決めたんだらうと想像する。

この場面は『二宮尊徳伝』(佐々井新太郎)の百九頁から百十頁が圧巻である。時代がかかっているのを割り引いても、入れ込む様は尋常ではない。最後に、何故成田山参籠なのか。「どうしてこう過したのか、記録にはない。一月に出奔、三月に成田山とあるだけである。記録どおりとすれば、はじめの一月二月の彷徨の苦悩をへて確実の一つの結論をえたと考えたのである。その結論をもつて成田山にこもり、鋭気をたくわえたのである」(『二宮尊徳』)。

私は、一月二月の彷徨でえた結論をもって山籠りしたというこの推測を新鮮に感じた。成田山についての説明はいくつかあるが、このように山籠りの意義をとらえたのは、管見では他になかったからである。だが、私の関心は次にある。

このあたりは嘗てから、多くの本が『報徳記』(富田高慶)を引く。そこに山籠りで「上君命を安じ、下百姓を救はんことを祈誓」したという記述を見る。しかし、揚げ足を取るのではないが、仕法で救おうとした村民に、結局のところ「救われた(生きる道筋を付けてもらった)」のは金次郎さんの方ではないか。私はそのように思いたいのであるけれども、「君に忠なれ」という時代の金次郎さんは、私のように決して思わないはずである。

続いて、「二十一日満願の日に於いて其至誠応志願成就の示現を得たりと云ふ。然れども先生終身此身を言はず、是を以て人其所以を知らず」(『報徳記』)とあつても、勿体ぶつた言い方だと思っただけである。

四、先ほど挙げた「奸佞」「奸民」「奸策」の語も、元はといえば『報徳記』にある表現である。『二宮尊徳全集』の「解説」

では、閲読の便を図ろうとして、日記の記述を補うのに『報徳記』等のいわば二次的な資料が多用されている。他にないと言う事情もあるが、これを利用する者は自らの指針を持たないと、委細尽くした「解説」に飲み込まれてしまう。

「出奔」しなければならぬのは、「解説」に頼る自分自身のことになった。

小田原駅東西自由連絡通路アーケードの完成

十二月二十日待望の東西連絡通路が完成した。東口正面の入り口からエスカレーターでアーケードまで上がれるようになった。また十六年春には駅ビル着工、十七年夏完成予定、駅とその周辺は益々変っていく。



小田原映画文化シリーズ③

私と映画―戦中、戦後の少年時代

植田博之

昭和十五年(二五〇)、皇紀二六〇〇年、『金鷄輝く日本の』この歌を歌いながら、国民は総力戦体制に突入していった。

総動員令下のために翌一六年に学校制度も変わり、小学校は国民学校となりその一年生となった。そして十二月、米英を中心とした連合国を相手に太平洋戦争が始まった。

当然、国民学校生徒(小国民)の私が観たものはほとんどが戦意高揚のための日中戦争と太平洋戦争の映画であった。

日中戦争の映画

先生に引率されたり、中文へ出征経験のある父と共に観た、『麦と兵隊』(火野葦平原作)、『西住戦車長伝』(上原謙主演)、などを覚えている。日中戦争の映画は、共通しているも雨と泥、そして行軍であった。中国全土に戦線を拡大していった日本軍は、もはや雨でも居眠りしながらも、ひたすら行軍するしかななく、文字通り戦線は泥沼化、兵隊達のご苦労を見せつけた。厭戦感を漂わせる寂しく暗い映像の映画と短調の軍歌は、製作者も、

作曲者も兵隊達もこの戦いの無意味さを知っていたと今思う。楽しく感じたものは『野戦軍楽隊』である。音楽学校出身の将校が、楽器に縁の無い隊員を集め、全くの初歩から、立派な軍楽隊に育てあげていく。紅一点、季香蘭(山口淑子)が中国娘に扮して出演した。

太平洋戦争の映画

緒戦の勝利を記録し宣伝する戦争ドキュメント、いわゆる戦記映画で『ハワイ・マレー沖海戦』、『空の神兵』、『加藤隼戦闘隊』(藤田進主演)、等々を観た。

その勇ましい艦隊や飛行編隊、そして少年兵を観ていると、自分も当然のように少年航空兵を目指して、戦時訓練、軍事教



▲「加藤隼戦闘隊」(1942年3月) (毎日新聞社・昭和映画史から)

練に励んだ。軍部の思惑どおりに洗脳され、取り返しのでない道を歩いていることなど全く考えもしない年齢であった。映画の力は大きかった。

又三郎と三四郎

数少ない非戦争もので印象的な映画は低学年の時に観た『風の又三郎』(宮沢賢治原作)である。どつどつ どつどつ どつどつ

ああまいいりんごも吹きとばせすつばいりんごも吹きとばせどつどつ どつどつ どつどつ

強い風雨に打たれた里の竹藪が、大波のようにうねっていく。歌とともに忘れられない、恐いシーンであった。

もう一つは『姿三四郎』(藤田進主演)である。明治の半ば旧来の柔術と新興の柔道が競う中、姿三四郎は修道館、矢野正五郎(大河内伝次郎)の門下になり、柔道の道に精進していく。

二人の名監督

この『姿三四郎』は東宝の黒澤明監督の監督デビュー作品である。同年、松竹からは木下恵介監督が『花咲く港』で同じく監督デビューした。

昭和一八年(二五三)太平洋戦争もガダルカナル島撤退、アッツ島玉砕、学徒出陣など戦局厳しく、映画制作でも困難な時期の

中で、二人の新監督が誕生した。現在世界のクロサワ、日本の木下といわれる日本を代表する名監督となった。(残念ながら平成十年お二人とも他界した)

戦局は益々厳しく、空襲も激しくなり、映画興行、映画鑑賞どころではなくなつた。監督や俳優も出征し、映画界は低迷を極めた。

そして敗戦、必勝の神話も崩れ、あらゆるものが変わり、静かに平和がおとずれた。

そよかぜとりんご

中国東北部、大連で終戦を迎え、昭和二二年(二五五)春、難民となつて、ようやく引揚船に乗ることが出来た。三泊四日のかえり船の旅、佐世保を目指した。船内では「引き揚げの皆様ご苦労様でした」と放送劇や歌で労らつてくれた。その時初めて『りんごの唄』を聞いた。これは、終戦の昭和二〇年一〇月、GHQ(連合国軍総司令部)の検閲第一号映画となつた『そよかぜ』の挿入歌として生まれたものだ。

作曲家の万城目正は歌手の並木路子に譜面をわたし、歌わせましたが、何度歌ってもOKが出なかつたそうだ。

「君の歌は暗すぎる。この歌は目一杯明るく歌って欲しいん

だ」。並木はその年、三月の東京大空襲で母を失い、軍属の父と長兄は行方不明、次兄は出征して消息不明であった。この寂しさと無念さは常に脳裏から去らなかつたのであろう。

「気持ちには分かるが、今日本中のひとが同じように悲しみに耐えている時だ。その人たちに希望を与えるためにも明るい歌が必要なんだ」万城目は言った。

映画も大ヒットしたが、こうして明るく誕生した『りんごの唄』は映画以上に人気を集め、多くの人を励ました。映画音楽(主題歌、挿入歌など)は映画を忘れられないものにしてくれるが、時には映画を超えるものもある。

国敗れて山河あり

小田原に一家揃って帰ることができ、本家(新玉の相模湯)に厄介になった。当時、湯屋は内湯の燃料不足の時代、庶民の生活の一部であり、憩いの場でもあったので、多くの客が入った。だから映画の宣伝ポスターの掲示は効果があつた。復興館、オリオン座、東宝館、富貴座四館のポスターが一週間毎に張り替えられ、そのたびにピラ下(優待券)が付いてきた。

湯を沸かす燃料運び、脱衣場での衣服の盗難の監視、等を手伝っては、その褒美にこの優待券を伯母からもらった。お陰さ

まで好きな映画は小使いを気にせず、よく見に行く事が出来た。戦後G日Qの指導方針に即して、軍国主義的なもの、封建思想濃厚なもの(例えば仇討ち)などを、映画制作会社は自主的に規制した。その代わり戦時中禁止されていた洋画は解禁となり、倉庫に眠っていたものや、新しく輸入されたフィルムが出回って、新しい文化の広がりに接することができた。

新制中学の頃はターザン、凸凹珍道中シリーズ、西部劇、海賊ものなど天然色に感動しながら、ジャンルを問わず観に行つた。邦画ではまだチャンバラものは自粛していたから、エノケン、ロッパなど演ずる喜劇に腹を抱えて笑つた。『多羅尾坂内シリーズ』(片岡千恵蔵主演)名探偵の活躍を手に汗して観た。

『鐘のなる丘』(佐田啓二主演)や『少年の町』(ミッキー・ルーニー主演)などを見ては、自分実に恵まれているんだと言いつつ聞かせた。

映画の帰りに、青物町の三政屋によって今川焼を買つたり、新宿の角にあつた岡西で汁粉などを食べながら友達と観てきた映画の話をしをし余韻を楽しんだ。子供心にも故郷にかえつた喜びと平和になつたありがたさを感じた。

青春時代を迎えた頃

二四年頃から、映画も黄金時代を迎えて、洋画、邦画を問わず、心に残る作品が登場した。

『晩春』『麦秋』『青い山脈』、原節子が眩しいように美しかった。『青い山脈』は唄もヒットし、新しい若い男女のあり方を啓蒙した。

二五年『羅生門』(黒澤明監督 三船敏郎、京マチ子)が初のベニス映画祭グランプリに輝いた。邦画も国際的に認められる時代を迎えて活気づいてきた。

『哀愁』(ロバート・テイラーとビビアン・リー)霧のロンドン、ウォータールー橋の出会い、恋に落ち、引き裂かれ、再会する。劇中に流れる『別れのワルツ』(日本の「蛍の光」と共に忘れられない。

正月の映画

元旦は明神さん(松原神社)に初詣に行くのが習慣であつたが、目指すは正月映画と出店の見物だつた。

正月興行は映画館にとって最高の稼ぎ時であるが、昭和二五年(一九五〇)は「腰抜け二挺拳銃」(今年一〇二歳で亡くなった喜劇王ボブ・ホープとジェーン・ラッセル主演)が主題歌『ボタンとリボン』と共に大ヒットした。世間では、「大人も子供もバツテンボー」と揶揄したが、この年一番の稼

ぎ頭となつた。バツテンボーをゆつくり言う「ボタンズ・アンド・ボウズ」のことと暫くして解つた。



▲「哀愁」1940年アメリカ。監督マービン・ルロイ、出演ビビアン・リー、ロバート・テイラーほか。(朝日新聞社・週間20世紀から)

高校時代、試験が終ると急いで山を下って、オリオン座へ、その前にトロントでラーメンを食べる。そして富貴座の場合は、橋本でうどん、東宝館は日新楼か日進楼で腹ごしらえと大体決まっていた。これが何よりの楽しみで試験後の開放感を味わつた。

当時ラーメンは八〇円、試験の出来が良いとチャーシューメン一六〇円なりを奮発した。

月謝三五〇円、PTA会費一五〇円の時代だから、本試験の後ぐらいしか、この贅沢なコースは取れなかつた。(つづく)

参考資料

週間二〇世紀 朝日新聞社
昭和日本映画史 毎日新聞社
阿久 悠 『愛すべき名歌たち』

私の青春 ⑭

続 京都練習飛行隊と終戦

菅沼 博

七、八個の黒い物体がボトボトというような具合に、順序よく落ち始めた。機体から離された爆弾はかなりゆっくりで、スロウモーションの映画を見ていようなスピードである。

爆弾が機体から離れ、数も七、八個であるということを確認するや否や、私は脱兎のごとく防空壕に飛び込んだ。

かなり長い時間である。数秒ではなく、数十秒の長い息づまる空白の時間のような気がする。グワン、グワンと猛烈な振動が防空壕の壁を振るわせた。バラバラと天井と壁から埃のような土が落ちて来た。二百米も離れた所に落ちた爆弾には、たいした恐怖心も沸いてこなかった。

その爆弾は、私の予想通り、滑走路に一系列の幾つもの大きな穴をあけた。

我々はその穴の補修作業には出なかったが、聞くところによると、人力で穴を補修するのに、その場所だけの土では穴を埋めるには十分でなかったそうである。滑走路の他から土を持って来

て、穴を埋めたそうであるが、元の土は何処へ行ってしまったのだろうか。

飛行機事故

加藤隼戦闘隊という名前をご存じだろうか？

有名な戦闘機部隊で明野に在隊していたこともあり、又、「加藤隼戦闘隊」という歌もあった。

戦争中、ガソリンが無いため、戦闘機が空から見えないように格納されていたり、隠蔽されている場合は、空襲でも飛び上がる必要はない。そのまま戦力温存ということで見え隠れしていた。

しかし、明野では、空襲となると一斉に戦闘機は飛び上がった。ただ飛行場に駐機しているのであれば、敵機の餌食になるため必ず飛び上がっていた。

空中へ飛び上がるといっても、迎撃のために離陸するもの、空中退避のために離陸するもの、等色々あった。

空中退避とは、空襲される前に飛び上がり、安全な地帯へ飛行し、空襲が終わるまで帰って来ないことである。どうして迎撃しないんだとい

う人に説明しておこう。

戦闘機が迎撃できる為には、全てが健全でなければならぬ。発動機の不調は絶対許されない。敵を攻撃する銃機の完全整備、完全な機体、攻撃精神旺盛な操縦者等々の諸様な条件がある。

とにかく、空襲となれば我々は作業を中断し、それぞれの与えられた任務に付く。任務が無い時は前に書いたような日向ぼっこという事もありうる。

しかし、飛行場の慌ただしい動きを見守ったり、機付き整備兵と共に戦闘機の慣性始動機を回したり、と結構動き回っていた。

空襲警報が発令され、敵機迎撃の命令が出ても、戦闘機のエンジンはずいぶん回らない。陸軍の戦闘機にはスターターは付いていない。

始動車というのがあって、戦闘機のエンジンの先端にクランク棒を密着させ、回してエンジンをかけた。

昔の自動車が発動機を始動させるのにクランクを手で回したのと同じ要領である。

空襲ともなれば、少ない始動車で数多い戦闘機の始動をしなければならぬ。後になればなるほど、敵の戦闘機による機銃掃射の餌食になる公算が大きい。となれば、始動車が来る前に慣性始動機でエンジンを回そうと

するのは当たり前前行動である。

空襲警報が発令され、出動を命じられた時は、出動する戦闘機の整備員や操縦士は、一秒の時間を惜しんで早く出撃しようとする。

我々は空襲になると、手近の戦闘機に飛び付き整備兵に協力して、慣性始動機の転把を回した。

全ての戦闘機には慣性始動機がついていた。若し、慣性始動機が付いていなければ、第一線部隊では始動車が無いので、その戦闘機は飛べない。

転把を差し込む場所は大抵の戦闘機では、エンジンの真下の胴体部分辺りにある。

一人でも回せない事はないが、回転数を上げるのに、相当な時間が必要である。二人または三人で回すと、たちまち回転数が上がった。

慣性始動機の本体は重い鉄状の円盤で、これを転把の回転により歯車で数万回転/分させる。その後この慣性の力をエンジンの回転に与える。

空襲の時は、誰でも急いでいる。慣性始動の回転が十分でないのに、エンジン始動をやって、エンジンがかからないという事が再三あった。

これは機付整備兵か、その機の操縦者が下手くそであったか

あるいは、点火栓の品質不良が原因であったのかもしれない。

空襲の場合は、エンジンがかかった戦闘機から離陸する。順番はない。早いもの勝ちである。春が終わった頃であった。飛行場は空襲で騒然となり各機のエンジンは唸りをあげていた。明野飛行学校正門前の向かって左側は広大な飛行場であった。

次々と飛びたつ飛行機のため、もうもうたる砂煙で飛行場は覆われてしまった。

それでも、その砂煙の中をいくぐりながら、戦闘機は次々と迎撃のため飛び上がっていった。砂煙の中を飛びたつという事は、雲中で飛び上がるのと同じである。現代ならいざ知らず、当時の頼れる計器は羅針盤のみであった。

勘を頼りに、見えない砂煙の中で、かすかに見え隠れする地面を注視しながら離陸操作をする事になる。計器盤の羅針盤を見る余裕が無いのが本当のところであろう。

我々はエンジンの掛かった戦闘機を送り出し、砂煙の中を見え隠れしながら飛びたつエンジン音に注意していた。

砂煙の中では四、五機のエンジン音が離陸のため唸りをあげて交錯している。

その数機のエンジン音の中

で、一機だけ左の方向へ切れて行く戦闘機のエンジン音が耳に入った。

我々飛行兵の危惧していた事が現実となった。その機の爆音は飛行場正門前左側にある松林の方向で「ガガーン」と凄まじい音をたてた。

明らかに松林に突っ込んで散じた音である。

空襲警報で迎撃を命ぜられ、砂煙の中を離陸中に左方向に進路がそれ、浮上したか、しない内に、先輩の操縦者はあの世に行ってしまった。

空襲警報が解除され、迎撃で離陸した戦闘機が帰り、平常の軍務となった。そこで話す我々飛行兵の話は、教育されていた事が、現実となって我々の目の前で発生した事柄である。

単発の戦闘機は、特に離陸時には左方向に機首を向ける性質がある。これはプロペラの回転にともなう後流によって発生する。視界が十分によい時は、目視により方向修正が可能である。

しかし、砂煙等で外界が十分に目視出来ず勘で修正をしたにちがいない、その方向修正が十分になされない結果、松林に衝突という事になったものである。

彼は見えない外界を見ようと注視し、方向修正も今まで通りの経験でやったのである。し

かし、現実には四、五米空中に浮かんだとたん、眼前に松林が現れ、回避の余裕もなく突っ込んだというのが私の推測である。

あの状況の中ではベテランの操縦者でない限り、方向修正が甘くなるのは当たり前である。普段の離陸は急激なエンジン操作はしない。空襲で迎撃戦闘となれば、目一杯のエンジン操作をする。その違いが砂煙の中で彼には解らなかつたのだと思われる。

急激なエンジン操作は急激な機首の左振りにつながる。無意識でした何時も訓練時と同様の方向修正が彼の運命を決めた。

結論から言えば、十分な訓練と経験が必要という一言である。

当時、昭和二十年初夏の頃の先輩の少年飛行兵で十四期・十五期では、飛行時間が多くても二、三百時間程度であったであろう。

七、八百時間以上でようやく一人立ちが出来たのではないだろうか。

彼の不運に対して残念としか言いがたい。

特攻隊員

私が明野教導飛行師団にいた昭和二十年三月、六月頃は、沖縄では日本軍と米軍が死闘を繰り返していた頃である。

特攻攻撃が当たり前となり、

我々は飛行場に並び、九州の特攻基地へ出発する特攻隊員を見送る事が度々あった。

居並ぶ我々の前を戦闘機に乗り、白いマフラーの端を少し機外になびかせ、拳手の敬礼をしながら見送る我々の前を地上滑走させて行く先輩達。

送られる彼等も最大限格好良く振る舞っていた。

我々も遅かれ早かれ、操縦訓練が始まれば、そんなに長い命ではないと、平然と見送りをしてきた。当時の時代がそのような考えにさせていたに違いない。

朝の授業開始八時前の体操をしている時間に、飛行服を着た飛行兵達が数人宇治山田の方から歩いて来るのを見た事が度々あった。

我々同期生は、「今朝も特攻隊員が九州へ出発するようだ」と言ったものである。

このように、飛行服で宇治山田から朝帰って来るのを見た時は、必ず飛行場での見送りがあった。

我々が毎日生活していた場所は飛行学校正門前左側の飛行場に接した松林の中の兵舎であったので、朝正門に入る彼等が特に目立った。

彼等は昨夜、宇治山田でこの世の命の洗濯をして今朝帰って来たに違いない。(つつく)

小田原の郷土史再発見

植田又兵衛先生と小田原水道(早川上水) 2

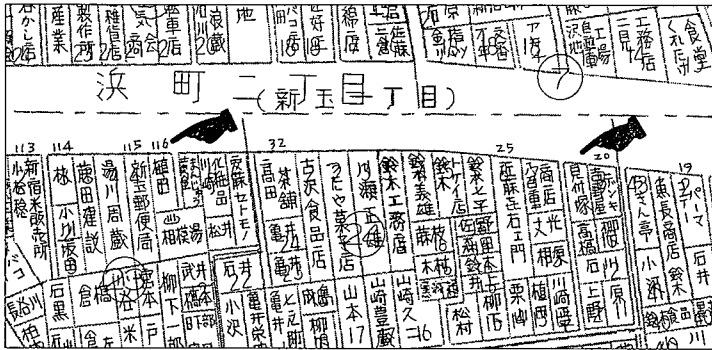
「史談会」史跡めぐりに参加して

石井 啓文

東海道の江戸(山王)口見附手前の宗福寺に、小田原の水道と教育等に尽力した植田又兵衛の事績が刻まれた墓がある。植田家は、その国道沿いで昭和四十年代頃まで銭湯「相模湯」を営んでいた。又兵衛は、町会議員を務め材木商の傍ら和算塾を開いており、その門下生を訪ねた藤井論考の続きから記述する。

広沢伊助は、明治三十二(一八九七)年九月、広沢利三郎の三男として小田原市幸一丁目に生れた。広沢家は、天理(利)という屋号の有名な天ぶら屋で、泉鏡花の「城の石垣」にもその名が見える。小田原という町は、箱根によって発生し、箱根によって発展した町であるから、近世以降は専ら往來の旅人を相手に繁栄した。気風は派手で二代続いた老舗はないと云われている。天ぶらの天理もその例外でなく、今は名前だけが残っている。広沢伊助は好んで伊之助という名を用い、又兵衛の墓の門人少年部にも伊之助とあるから、大正の初め頃すでにこの名を用いて

いた。少年の頃、友人山本孟一郎に連れられて又兵衛に入門したが、半年位しか続かなかった。神保儀三郎は、明治二十九(一八九六)年八月、神保繁蔵の長男として小田原市山王原に生る。母はクマ。儀三郎が又兵衛の塾へ通つたのは、十五・六才から二〇才頃迄のようであった。教授



▲小田原市明細地図 (昭和41年版)

内容は八算総まくり、開平、開立、曲尺(裏尺)等。又兵衛は、相手の職業によって一人宛別のことを教えていたらしい。儀三郎は材木屋で、市会議員をつとめ、山王地区の有力者である。

永井政吉は、明治二十二(一八八九)年七月、永井喜八の長男として、小田原町万年二丁目に生る。母は中島リヨウ。政吉は昭和十三(一九三八)年五月死亡。小田原市中島、本久寺に葬る。長男良治が家督を相続。政吉が現存してないので、いつ頃どんな内容を、又兵衛から教わったか明かでない。政吉は一時鈴木姓を称したが、正確な時は不明である。

又兵衛の墓には、青年部委員鈴木政吉とあるから、又兵衛の歿した大正三三(一九四四)年頃は鈴木姓であったと思われる。政吉及びその長男良治共に大工である。湯川周蔵は、明治二十一(一八九六)年五月、湯川辰五郎の長男として生る。母はトラ。植田又兵衛とは隣同志で、他の門人とは別に教わり、別個に行動したので、又兵衛の墓には周蔵の名前は見えないが、特別に目をかけられていた。明治三十五(一九二〇)年、高等小学校卒業後、漢学英語及び又兵衛の塾へ通つた。又兵衛からは、八算総まくり、幾何(和算)を教わった。周蔵氏は「自分が今日あるのは或る老

人のお蔭である」と云われたことがあるそうだが、事情を知人の話では、或る老人というのは植田又兵衛のことで、珠算以外のことも教えを受けたらしい。現在本籍地である植田家の隣で、千代田火災海上保険株式会社代理店。以前は、同番地の小田原新玉町郵便局長であった。

以上が、「和算研究」に掲載された藤井論考の要旨であるが、前文で当論文は「豆相地方の和算家」と題して「科学史研究」に紹介した追補であるという。同書の記述をも訊ねてみた。

(8) 植田又兵衛 小田原新玉3丁目に住し、尾張屋呉服店主より算術を習う。山の測量等は獨習。福住久蔵にも師事した。篤學良實信士。(墓碑解説文割愛)

遺族は孫實氏が、日本通運株式會社小田原支店作業係長。

四、植田又兵衛とロシア正教

又兵衛が、ロシア正教信者であったことは植田家にも伝えられていた。上田謙二氏は、著書「城と堀のある町から」に記し、「曾祖父はロシア正教の信者で、神田のニコライ大聖堂の建立に参画したりした。ニコライ

大聖堂をバックにして、ニコライ大主教を中心に、数十人の信者代表として曾祖父が写っている記念写真が、私の家の最も古い写真として生家に残っている。父の代まで洗礼名をもっていた」

一昨年(2003)二月、刊行された「小田原ハリストス正教会百二十年史」(以下「百二十年史」と略す)も、記している。

「城下町として繁栄を重ね明治期を迎えた小田原を、正教の聖地と選んだのはニコライ師の慧眼であった。城下町はその地方の産業の中心地で人口密度が高く商工業の賑わいがあり、新時代に相応しい新しい文化の受容力と、武士階級の高い教養とに着目したといえる。「土族」となった、この集団の中に正教伝道の存在を考えたのである。明治文化開花の時に活躍した人材の多くは「土族」であり、小田原正教会の初受洗者も二人の「土族」であった。版籍奉還で禄を失い主君も消え、存在価値を喪失していた武士階級が新しい価値観を求めて教会の門をたたき正教の道を進んだといえる。明治二年、小田原藩士の数は千二百二十四人と記録されている。明治十年(一九七七)四月八日、小田原ハリストス正教会初の受洗者は土族友田清・峰義準の二名であった」

「明治の新時代に活躍した多くの人材は土族」とあるが、小田原の場合はそのとは言えない。明治維新の際、小田原藩は結果的に失態となる「小田原戊辰戦争」と言われる事件を起し、藩主忠礼はその責任を問われ永蟄居、家老は自刃・切腹をも命

じられた。こうしたことから、多くの藩士が廃藩後、小田原を去っている。従って、新時代の小田原町政を担ったのは片岡永左衛門等多くは町人であった。「土族の多くが新しい価値観を求めて門をたたいた」ともあるが、どのくらいの人数だったのだろうか? 同書は、又兵衛についても記している。

ことであり、法律による制約であり、明治後期に生じた当会の事柄はその寺院単独の問題であったが、当時の一つの風潮ともいえる。(後略)
大正三年
(日誌 大正三年ノ概況)
(前略) (大正三年での特記事項)
4月9日 イオフ植田永眠ス 当会創立ノ領洗者ニシテ 会事ニ尽瘁セリ 享年六十八
同日 同人埋葬執行(聖堂) 司祭説教ス会葬者三百名 墓地ノ件ニ付キ大島警察署長ヲ訪問ス 寺院住職ガ正式ノ埋葬ヲ拒絶セシニ因ル
この年にも埋葬問題が生じ、神父の苦勞が書かれている。(後略)

「日誌」明治四十三年
11月3日 天長節(明治天皇誕生日)感謝
来拝者十三名 植田家墓地ニ付キ山王寺ノ故障ニアフ 警察署ニ出頭コレヲ解除スルコトヲ相談ス 同寺住職説論ヲ受け埋葬ヲ承諾セリ
明治十七年までは葬儀埋葬は神官か僧侶によつてのみと定められており、キリスト教の葬儀は不可能で、その続きとして寺院でのキリスト教による葬儀の許可を寺院側が拒んだのであろう。この件について「正教新報第七二〇号」には、「小田原教会近時」として記事が掲載されている。

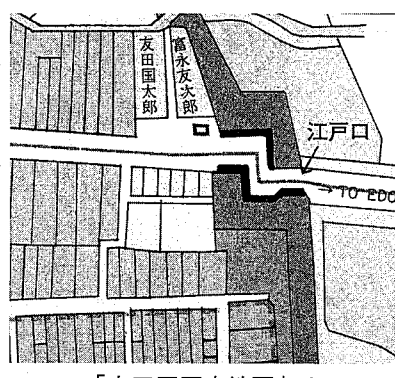
「十一月に入り当会は二人の永眠者を出せり。一はユリヤ植田姉にして、一はイオアン浅石兄なり。前者、即ち植田ユリヤ姉の埋葬に際し、墓地管理人なる僧侶は曹洞宗の規定を以て、他宗の死者の埋葬を拒絶せしを以て、中島司祭は自身警察署に出頭し事情を具申したるところ、該僧侶は召喚説教を蒙り頑迷なる申し分を撤去し無事埋葬を済ませたるが、この種の迫害の尚当地に於いて絶えず繰り返さるるは、実に遺憾の極みといへし」

葬儀埋葬時の信徒受難については正教会開教以来の問題でもあった。「ニコライの報告書」や「日本正教伝道誌」などに詳細に記述されているが、それは明治初期の

大正三年の又兵衛他界の時にも生じたとある。また、又兵衛について、「会事ニ尽瘁セリ」とも記している。「尽瘁」とは「尽くし疲れること」である。キリスト教の普及に関しても尽力された又兵衛の性格の一端が窺えるが、当時の教会式葬儀の会葬者三百名は相当な人数ではないだろうか? 又兵衛の逝去を悼む多くの人々がいたことが知られる。

では、又兵衛の正教入信の発端は何であつたらうか? 小田

原最初の正教入信者、土族友田清(小田原藩士友田國太郎)との交友が考えられる。彼の家は、江戸口(中村静夫作「小田原歴史地図」)にあり、植田家に近く後述する鍵番との関係も窺える。



▲「小田原歴史地図」より

更に、又兵衛他界後、十数年を経た日誌にも記されている。

「日誌」大正十四年(前略)
3月21日(前略) 大震災ニ罹リタルモ敷地所有ノ為メ復興以外ニ進捗之レ全ク小田原創業ノ際敷地買入ニハ苦心贊嘆セシ元老ノ力ニ寄ルモノト痛感シ報告墓前追悼ヲ行フ 其人ノ氏名 ルカ高橋 イオシフ峰 ゲデオン中津川 イオフ植田ノ四民

関東大震災後、容易に復旧できなかったのは、創立時の先人が土地を購入していたお陰と追悼している。教会に残されたメトリカ(会員名簿に相当)から、又兵衛は明治十年五月十二日に受洗、最初の友田・峰(同四月八日)に次ぐ三名の内の一人である。

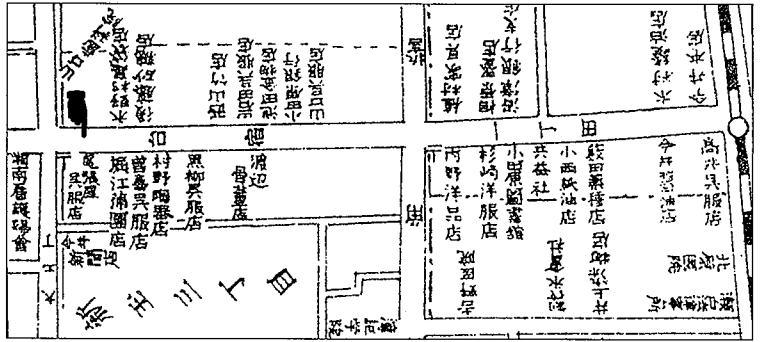
五、植田又兵衛の職業と事績

又兵衛について知り得る資料を、「小田原昔話」と上田謙一氏の随筆を別にして、「明治小田原町誌」「科学史研究」「和算研究」「小田原近代教育史」「小田原ハリストス正教会百二十年史」の五点に見出した。

この内、「町誌」と「百二十年史」は当時の史料を中心に記している。他の三点は昭和三十年代以降の調査を基に、又兵衛他界後四十年以上が経過して刊行されたもので、これらを全面的に信頼することはできない。

先ず、生年月日であるが、碑文に「弘化四年(二八七十一月)とあるが、藤井論考は「弘化三年(二八六十二月二十日)」と一年近く相違している。同論考は、縁戚関係等を詳細に記していることから、この生年月日は戸籍抄本によるものと思われる。

次に、最も関心のある私塾(「植田塾」と仮称)は、「文部省第九年報」に「自卓舎(校主植田卓爾)」とあることから、「教育史」では卓爾を又兵衛と同一人物と見ていた。しかし、卓爾と又兵衛を結び付ける史料は見られない。卓爾は小田原藩士で大久寺に墓があり、又兵衛とは別人である。



▲小田原案内図(大正2年)

藤井論考は、植田塾の塾生であつた人々を訪ね、思い出話と共に主な門下生六人について記している。彼らは明治二十一年生まれが二人、同二十、二十二年、二十九、三十年生まれが一人づつである。同塾は、明治三十年頃から十才前後の子供たちを対象に開かれ、青年となつてからも師事していたのである。又兵衛は破傷風が原因で他界したとある。急死であろう。それを悼む門下生によつて建立された顕彰墓である。

植田塾は、月謝を現金で受け取らなかつたということも、特筆されて良い。なお「研究史」に「尾張屋呉服店主より算術を習う」とあつた。同呉服店は現国際通りと大工町交差点の角にあつた(「小田原案内図」)。

そして、又兵衛の職業について藤井論考は、樵夫・飛脚・湯屋とあつた。これに植田家に伝わる小田原城鍵番説がある。「樵夫」について、新玉・新宿という場所を考えると容易には信じ難い。門下生談話にも樵

夫は全く出ていない。「科学史」では、山の測量を独学したとある。幕末から明治初期は異国船渡来もあり測量技術が重んじられていた。時勢に敏感な又兵衛の向学心から樵夫とされたのではないだろうか? 碑文に「曾」とあるから、余程若い頃の話かも知れない。「教育史」には、材木伐採・販売業とあつた。地図の中村静夫先生に、明治三十三年発行の「百家明鑑」をご教示いただいた。右に示すように材木商が確認できる。

次に、藤井論考の「飛脚」の話は具体的で説得力がある。あ

るいは、小田原藩の使番で、飛脚・鍵番はその中の仕事の一つであつたと考えられないか? 江戸時代、小田原の町飛脚は本町の秩父屋利八が営んでいた。明治五年(二七三)、宿駅制度が廃止になり、宮前町の清水伊兵衛(小清水家十三代)が駅通寮等外四等付属格を命ぜられ小田原郵便取扱所を開設、同八年(二八五)には小田原郵便局と改称している。駅通権正前島密はしばしば清水家を訪れていたといふ。その後、葉種商小西家(十

同郡同新玉町一丁目一六
分鍵屋 植田 又兵衛
材木商
▲名家鑑(明治33年)

一代正陰)に郵便業務が引き継がれた(山本道夫著「小田原の郵便」)。また、郵便局は万町の柳田亀五郎と清水伊兵衛の共同経営によるもので、「清水の郵便局」と呼ばれ、亀五郎が世話したかつき(飛脚)は三人だつたといふ(田代亀雄著「小田原昔話」)。同書、消防の項で又兵衛を記しながら、郵便の項にその名が見えないことから、又兵衛は民間飛脚ではなかつたように思える。鍵番について、植田氏は江戸口が家から近く、毎日明け六ツ、暮れ六ツ時に開閉された府内出入り口の鍵番と言われている。

しかし、そこには門番を兼ねた足軽長屋があった。その足軽の長たる立場で鍵を預かっていたのではないだろうか？

湯屋(相模湯)は、材木商が確認できたことから又兵衛他界後、大正時代以降の開業と思われる。

また、碑文に「報徳を広め」とあり、「科学史」には「福住九蔵に師事」とあった。報徳の精神を子供達に教えたことは知れるが、報徳を特筆する資料は発見できなかった。今後の研究課題である。それにしても門下生の談話は分かり易い。特に、戦争反対と下肥騒動は、又兵衛の剛直な性格の一端を窺わせ貴重である。

これまで「町誌」以外の郷土史に殆ど記されていない植田又兵衛の事績の第一は、小田原水道(早川上水)の保全整備と近代水道敷設の町会議決であろう。

現在、分水事件の功労者として、お塔坂下早川取水口に市川文次郎の顕彰碑が建てられているが、彼は板橋村の功労者と言える。小田原町の功績者として植田又兵衛は特筆されて良い。

また、学校教育の基盤作りと私費を投じての植田塾。更にロシア正教への尽力も注目すべき事績である。宗福寺「植田又兵衛先生之墓」顕彰文がより市民

に知られるよう努めたいと思う。

六、小田原の年中行事 「水道浚」

明治二十一年、又兵衛たちが松原神社内に事務所を設け、小田原水道を護り分水事件を落着させ、更に近代小田原水道の敷設を議決させ、私たちが日頃、何不自由なく使用している現在の小田原水道の礎を築いたことは、史料が物語っている。

現在、当市はこの小田原水道を最も古い時代(江戸初期)の呼称である「小田原用水」を用い、小田原北条氏の事績も日本最古の水道であることも殆ど知らせていない。そこで、当史談会で「早川上水」として日本最古の水道を知らせるよう文化財保護委員会に陳情したが、「小田原用水」が小田原の伝承であるとして却下された。

今回、「植田又兵衛」を調べ、解明の発端となった田代亀雄著「小田原歳時記」と、片岡永左衛門著「駅鈴余韻」の「明治維新以前の小田原の年中行事」は、「水道浚」を記している。

「水道浚は此の月(六月)なるも、日限は其の年の都合にて何日と定らず。昔は鑿井の技術は幼稚なるのみならず、費用も多き爲め、水道の在るは山角町、筋違橋、欄干橋、中宿本町、宮前、高梨町、萬町、新宿、茶畑、代官町、千度小路、古新宿、青物町、壹町、臺宿町は掘抜は勿論掘井戸も甚だしく、多くは水

道より引水し飲用となしたるも、各家にて引用することは不可能にて、共用する家多く、家前の道路に設け使用し、壹戸にて家中に引入れて、専用を許可するは容易の事に非ず。井戸の個数も確定して、増加などは殆ど許さず。位置の変更にも其の筋の許可を要し、水道の漏水に就きては嚴重に取締り、町奉行附の小奉行は常に巡視し、水上にて自儘の使用を許さず、水車等の引水も慎行の外はなざしめざれば、水尻の新宿、古新宿にては弛緩し、巡廻して引水を注意する者無く、水上にて自由で使用し、水車をも増設し、各家の引用にも個数の井戸、水溜を装置し、其の上にも腐敗するなど、水尻を溝に放流するもあり、水下は常に水に不自由し、水道も干揚りて苦情百出し、遂に明治廿壹年の濁水には爆發して、板橋村と水論を生じ、郡長の不信任を決議したる騒動をも引起したるが、藩政時代には人夫は宿の負擔なるも、水道蓋は領主から下渡され、松板の厚さも貳寸、巾は壹尺より尺貳寸三寸位にて、水道蓋として地中に埋むは惜しき程なりしに、其の後は蓋も町費となり、品質は彌々下りて丸太となれり。當時の本町名主の御用留には「

と、水道蓋の付替えと井戸の移設願い二通の文書を示し、「以下の貳通は、水道浚見廻に差出したる請書と、洩水に對する達書なり」更に二通の「水道浚」に関する古文書を記している。

ここで「水道」と呼ばれている水路が、相模国風土記稿の小田原宿では「早川上水」と記し、明治時代は「小田原町水道」として、「水道浚」の年中行事があったことが立証される。「小田原用水」が伝承などという事実は全く窺えない。

昭和十一年、近代水道が敷設され水道の役目を終えた水路

は、終戦後は文字通り「用水」となり、そう呼ばれていたのは理解できるが、江戸時代初期に「小田原用水(水道の意)」と呼ばれたのとは全く違った意味であることが知れる。「用水」と称するのは、小田原北条氏の事績をも抹消することになり、片岡永左衛門や田代亀雄が伝えようとした年中行事「水道浚」をも、結果的に抹殺することになろう。又兵衛もこうした年中行事を知ればこそ、夜を徹して水道(早川上水)を護ったとも言えよう。

おわりに

史談会史跡巡りが縁で、植田又兵衛先生を訊ねた。水道経営の事績と、小田原藩士ではないか? と、二つのテーマを念頭に調べてきたが、後者はどちらとも断定する史料の発見に至らず、その調査内容は割愛した。それは、又兵衛が廢藩の際の藩士氏名録にある植田藤輔という人物の可能性を否定できず、調査を続けているからである。

現在、小田原高校附近に「植田先生碑」が建立されているが、「教育史」が同一人物と見た植田卓爾に関する碑で、又兵衛とは関係はない。詳細は、小田原藩士に関する調査結果とともに、報告の機会が生まれることを願っている。

補遺 尾崎亮司 十一

小田原城廢城後の變遷

岡部忠夫

小田原城廢城後の變遷

- ・「小田原保勝会略記」碑に関連して
- ・小伊勢屋の身代を播るがせた小田原競馬場建設 ①④ (No.一八四〜一八八)
- ・小田原城内高校とかかわりある人びと ①③ (No.一八九〜九二)
- ・小田原藩の変遷① (明治維新前後以降)
- ・小田原藩の変遷②
- ・小田原城廢城後の變遷 (次号以下に掲載予定)
- ・北村透谷碑について
- ・お濠埋立反対運動
- ・むすび

(以上本号)

小田原城廢城後の跡地は、陸軍省で管理することになり、その後十年間はあまり変化はなかった。

明治四年(二七)十二月に、池上村(小田原市寿町二丁目)宮内太治兵衛は旧城郭内開拓小作税請書を小田原藩生産方役所に提出した。往事ならば藩の面目にかけて許されないことだ。その他、『小田原市史』別編「城郭」には、小田原城郭内に屯営の建築、練兵場の設置や城内米倉の破損、小田原城諸門・櫓等の売却報告、小田原城内米倉売却報告、三ノ丸地不要の場所を売却して宜しいかの伺等々、主に足柄原から出された資料などを中心に「陸軍省大日記」や、また昭和の初め頃のお濠埋立反対運動の動向(反対運動の立役者は尾崎亮司)についての新聞情報などを載せている。

関重磨の強運 関は小田原藩の上級の士族で、榎本武揚に従い北海道に佐幕政権を打ち立てようとした人であるが、運勢が強かった。関は江戸湾(東京湾)に碇泊中の幕府軍艦に乗った。最初に乗った昌平丸で、諸国の脱藩者遊撃隊の残兵等と乗り合わせた。折から八月十九日の台風に出会い同艦は損傷し、全員咸臨丸に乗り移った。場所は観音崎の沖合だった。関は咸臨丸に乗り移ったときから船と運命を共にするつもりだった。船は流された。家伝の愛刀を帯び、身体を柱に縛り付け拳銃を胸にしていると、水夫長が怪しみて「船が沈没するときは船中の全員が死ぬのだ。貴様が先に死ぬことはない」と叫んだ。関は一変に緊張していた気持がとけ、気が緩んだ。そのうち台風は静まった。船は下野国犬吠崎東南二度の場所に流されていた。帆柱は折れ船腹はなだしく損傷し、他の艦船の姿は見えぬ。追随困難とみて船長の判断で清水港に立ち寄り修繕することになった。清水ならば徳川家があり全員が自首しても大丈夫という目算があったのだらう。ところが、関は直接小田原藩に自首したのがよからうと考え、皆と別れ単身小田原に向かうことにした。

脱藩は罪が重い。今回は特別の理由で減刑されると関は期待していたかどうか? 関は脱走にあたってその理由を上役に送っていた。

関は下田港の柿崎で上陸すると船を雇った。小田原藩知事の命をうけ探索方であると揚言しながら、八幡野、川奈、福浦村と船を繋ぎ早川村に上陸した。関は官軍の探索の厳しいをよく知っていた。清水港に立ち寄った咸臨丸は官軍の襲撃を受け多くの死傷者を出した。関の自首に藩の重臣達は協議を重ね、小田原藩知事大久保忠良の意を受けるとかえって忠良から金一封をうける程であった。関は、これをもって「ご苦労であった。休養を十分にとれ、処分のこととは不問である」との意味にうけとった。やがて廢藩置県となり、足柄原の官吏として奉職することとなり、榮進して足柄下郡長となった。

小田原士族の窮乏 小田原藩は維新政府に反抗したため十二万三千石から六万石に減封され、小田原士族は苦難の道を歩んできた。その窮乏ぶりを明治十六年(二七)、小田原駅五か町駅戸長総代興敬基から足柄下郡長関重磨あてに出された。

小田原士族 一〇八一戸
 山中荻野藩士(小田原藩の分家) 七戸
 そのほかに他藩藩士 十六戸
 以上一〇四戸中
 可なく生計を維持するもの 三三戸
 辛く生計を立てるも追々生活を失する 九八九戸
 に至りしもの 八三戸
 目下飢餓に陥らんとするもの

西南戦争のころよりの物価騰貴は引続いたため資産がなければ生活の目途を失い、退職手当として交付された公債及び株券を次第に切り売りし、または借用の抵当に差

し入れなどして財産をなくした。また、有志が資金を出し合い種々の商売に手をだし、また、精米事業に従事したが何れも破産、「武士の商法」であった。それに第四十四国立銀行に加入した者は、明治十五年(一八八三)国立第三銀行に合併したため瓦解同様であった(『明治小田原町誌』中)。

士族が藩士として日頃の業務を考えると、職種は限定されていた。幸い教師としての道を選んでも下級の場合は遠隔地にまわされ、下付された家から離れなくてはならなかった。生活に窮した者は手に職を付けることが必要で家を捨てた。子弟が丁度、役人・軍人・教員の養成機関の募集の年齢であつても、希望者は総てというわけには行かなかつた。勢い職人の道を選んだ。既に幕末に食減らしのため寺の小僧となつた者もいた。

町民の多くは「時代が変わつたんだ」「潮目が変わつたのだ」と冷やかに彼らの落胆目を眺めていたかも知れない。

廃城後の跡地利用 明治二十二年(一八九〇)になると跡地を利用する動きが出てきた。以下片岡永左衛門『明治小田原町誌』から、廃城後の跡地利用の関連事項を拾いあげよう。

明治22年9月19日 御料局静岡支庁小田

原出張所

註 御料局営林署の名称の変遷(括弧内は制定年)

宮内省御料局(明治18年(一八五五)帝

室林野管理局(明治40年(一九〇七)帝

室林野局(大正13年(一九二四)営林

局営林課(昭和22年(一九五七))

明治22年2月16日 城跡払下臨時委員会

明治24年10月5日 「城跡払下に関する事務引継書」(町長交代に伴い)

明治24年12月14日 旧城址分割に関する措置

明治25年1月18日 報徳二宮神社敷地売却

明治25年9月12日 報徳二宮神社設立許可及び尊徳の逸話

明治26年5月17日 大久保神社設立許可

明治27年10月24日 大久保神社新築落成

明治27年4月15日 報徳二宮神社遷宮式

明治28年6月 大久保神社県社に列す

明治32年2月 御用邸建設のため小田原城址調査

明治32年10月8日 御用邸敷地として町有地売却

明治33年1月13日 御用邸地鎮祭執行

明治33年11月28日 大久保神社移転工事落成、遷宮祭執行

明治34年1月13日 常宮、周宮両殿下、邸御成(御用邸落成以前も両殿下は、例年小田原に避寒なされた)皇太子殿下御用邸御成

明治34年4月14日 報徳二宮神社県社に昇格

明治40年4月15日 御用邸南側道路拡張

明治44年11月23日 小田原城址の『明治小田原町誌』により払い下げ問題

〇二月、城址払下げ出願で臨時委員を選挙で林盛安、吉田義方、片岡永左衛門、今井

徳左エ門、今井廣之助の五名を選んだ。

小田原町としては、先年来城址払下げを陸軍省に陳情してきたが、軍は頑として首を縦に振らなかった。ところが、城の縁故者に払下げの内規があるのを聞きつけ、委員を上京させ大久保家を交渉させた。同家では祖先相伝の地なればと承諾しなかったが、町方の懇願を黙視出来ず、城址(土地)に必要な主旨で遂に大久保家より陸軍省に出願することとなり、許可の上は二の丸以下は小田原町に転売する契約を密かに結んだ。

契約内容は、大久保忠礼子爵の陸軍省より払下げを受けた旧城址のうち十二町二反二畝十二歩八合七勺を小田原町が五千円で買受け、残部の六町九畝十七合は小田原町で借受け、土地より生ずる利益は小田原町の所得とするものだった。

ところが、その契約は洩れ、小田原在住の一部藩士は町役場および城址払下委員に対し懇請し、駄目だとして脅迫し契約を阻止しようとした。また、総代を上京させ大久保家に懇請して土族団体の共有にしよう

と働きかけた。一時は非常の大問題となったが、大久保家より家扶を派遣し、小田原の主立った土族と委員が意気立つ反対派の士族を慰撫した結果、円満に解決した。

二宮神社の創設 明治二十五年(一八五二)一月十八日、小田原町議会は報徳二宮神社敷地として旧城内南曲輪町有地二反歩(六百坪)の売却を議決した。この段階で既に報徳二宮神社設立の気運があつた訳である。

設立は民間から起こつた。福住正兄を初め駿河・遠江・三河・甲斐・伊豆・相模六カ国の報徳指導者三十五名が二宮尊徳の偉業を後世に伝え、報徳の教えを信奉する人

の心の拠り所とするため、同年四月、神社創建願を神奈川県知事に提出した。このときすでに福住正兄は病床にあり、神社選定及び建設に関する一切を中上喜三郎へ委任していた。

神社創建願を提出した翌月には早くも起工している。おそらくは、神社の創立は明治二十四年の贈位を機として考え出され、早晩設立許可が出るであろうと見越したものと考えられる。あるいは、福住正兄の生きているのに間に合わせようとしたのかもしれない。贈位の契機となったのに富田高慶の『報徳記』がある。明治天皇が直接読まれる機会があり、天皇は痛く感激され、各都道府県知事に読むように命じた程である。神社設立許可は、同年九月十二日で、小田原城主大久保氏を祀る神社より一年早かった。

小田原町が二宮神社に売却した土地　ここで困ったのは現在の二宮神社の敷地と小田原町が二宮神社に売却した七反三畝二十

九歩と差のあることだった。高橋佐年氏によると、二宮神社の初期は現在のと異なり、今の報徳会館の近くにあったという。なるほどと納得できた。報徳博物館の斎藤清一郎先生から二宮神社年表をいただいた。敷地のズレは次のようになる。

当時の社殿は現在の報徳会館の裏手にあった。参道は旧小田原城のお茶壺橋から入って今の小田原市立図書館付近を通って境内に入っていた。ところが二の丸に御用邸が建設されることになったため現在の一の鳥居から二の鳥居辺の町有地一、九五七坪を買い入れ、これを参道とした。しかし、二の鳥居から社殿までは鍵状に進み、不便であるため、今の社殿の位置にことが決まり、明治四十二年(一八七〇)許可され、移転に際し本殿と幣殿を新築し、今までの社殿を拝殿として接続させ、同四十三年四月に盛大な遷宮が行われた。

御用邸の建設　明治三十二年(一八九二)二月御用邸の建設は始まった。御用邸の建設は

如月やポケットにある吾が体温　神山つとむ

如月は陰暦二月の異称である。一年で一番寒い月と言われている。寒い朝の外出、コートのポケットに手を突っこむとその温かいこと、誰れもが経験することであろう。

指先にぬくぬくと体温を感じると、自身の体温でありながら何か特別に嬉しい気分がするのである。しかし如月となれば待望の春はすぐ目の前、心が和やかになるのである。「ポケットにある吾が体温」のフレーズが、如月の季語と程よく適合してさらりと気持よく詠われている。

(剣持芳枝)

京大医学部の御雇学者ドイツ人ベルツ博士は、国府津でチャーターした船で相模湾を視察していた。その報告によると、真鶴が保養地として適当であると折紙をつけていた。鬱蒼とした森林がよかつたのであるうか。

話は後先になるが、明治十八年になると足柄県では地押しが行われた。江戸時代にすでに行われているが、維新以来、地権者が大分入れ変わっている。この辺で調査しておこうと言う状況であったのであろう。

特に小田原藩ではその事情が顕著であったと思われる。とりわけ、町が田舎より甚だしかったのではないかと考えられる。と申すのも下級の小田原士族が職を求めに長年住み慣れた先祖伝来の家を棄てざるを得なかった。現時点から推定を下すのも迫力に欠けるが中、下級の侍の住んだ「さいかち小路」も元・小田原士族は一軒だけで、それも敷地は現在半減している。今でもお屋敷町と呼ぶ人がいるくらい閑雅なところである。

地押しと言っても、全部調査されていない。人家のない場所は削除されているようだ。現に南町二丁目六番の地は江戸時代のそのまま、明治時代、横川さんの別荘のあったところと伝えられているが。

註　縄延　江戸時代、検地に使用した水縄が実際に延びること、そのため測量面積より実面積が多いことをいう。縄緩み。縄詰りに対していう。(『日本国語大辞典』)

註　水縄　検地の用具の一つ。面積を測るのに用いる縄。三つ繰りの麻縄に柿渋跟蠟を引き、一〇〇メートルの長さにしたもの。(『日本国語大辞典』)

決して早いものではなかった。既に伊藤博文は、明治二十二年十二月緑一―八番地を買入れ憲法の起草として由緒がある夏嶋(横須賀)の別邸を移し、父伊藤重蔵のため居宅として、二十三年十月には小田原御幸浜海岸に別邸滄浪閣を落成している。なお、因みに挙げるとそのころ東

元旦の朝、若水を汲む

石井啓文

「大正十五年一月一日

六時すこし過ぎに起き出で

若水をくみ 洗面 供養 礼拝。皆々をうちつれて初日出拝みに海岸に行く 時刻丁度よく立派なる初日を拝み 数日このかたの望みとげられてうれしさに心

勇む。帰りに一同十二畳にてお屠蘇お雑煮祝ふ 昨夜より準備整へたることとて何の手数もなくお膳整ふ ご近所六軒へ御年賀の挨拶にゆく。それより直ちに二宮神社と松原神社に詣づ

一旦帰宅。一同十人にて益田さんにお年首にゆく 帰途海蔵寺と早川の観音様とに詣づ 黄昏帰宅 空腹をかかへて帰る 夕食 一同つかれはてて七時頃床に入る。のどかなる初日出を拝み 二つの神社と二つのお寺とに詣で ご近所へご挨拶もすませて おだやかな一日はくれた

平和に徐々に発展すべき一年の幸先陸離たる心地してうれしさいとど深し」

◆近藤道生著「平心庵日記」(角川書店)。著者は小田原の開業医平心庵(近藤外巻)の長男である。

◆邪気を払う若水をくみ、心待

ちにした初明かりに手を合わせ

る。簡潔な数行が元旦を迎えた心の弾み、清浄な朝の冷気をも伝えている。漢文の素養あつてだろうが、昔の人は端正な文章を書いたものである。

◇印は、読売新聞「編集手帳」の書評である。

◇「絵本江戸風俗往来」に、「正月(中略)明けの鶏一聲に舊を除き、萬戸さらに新まる、若水を汲み上ぐるを、今年の事始めとなす。

若水 例年正月元日早天に、初めて若水とて井水を汲み、その水にて雑煮をととのえ福茶を煮ること、上下貧富の別なく皆

同じ。この若水を汲める手桶も、新調して輪飾りをかけ、今年の恵方に向けて水を汲む。中にも家々の舊式ありて年々失うことなし。また神社等には古式自ら備わりていと厳格に舉行せられるとかや。總じて元日は空も麗らかに遠近静謐にして、若水汲める頃明けの鳥告げ渡り、初鶏の聲相聞こえて東天紅の光景、今少し以前までも雑踏せし町々も静まり、心にさわることもなく、勤めの役とて煩しと思ふ心なく、新年の祝詞相互に自ら出づるも目出度かりける、大江戸の新禧にこそ」とある。

◇水は、生物にとつて絶対に欠かせない。昔はその日に必要な水を貯えることが、その日、最初の仕事であつたという。若水を汲む記録は平安時代には見え、立春の早朝、恵方(生氣方)の水を汲み、朝廷に奉つたのが

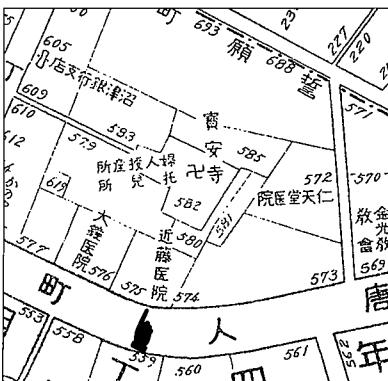
本来の姿であつた。この儀礼が庶民の生活に伝承され、室町時代頃から正月元日に行われるのが、一般習俗となり全国に定着した。

元日の若水に一年の邪気を



▲若水汲みの絵図「温古年中行事」所蔵

▲小田原案内図(大正2年)



▲小田原案内図(大正2年)

除く効能があると信じられ尊重されたからである。宗教とは異なる信仰文化であり精神文化とも言える。江戸時代には、「上下貧富の別なく皆同じ」が、良

い。

◇水道の蛇口をひねれば簡単に水が得られる。一千年以上続いた正月の儀礼が、文明の進歩と引替えに急速に消滅してしまつた。私の生家も私が子供の頃は井戸であつたが手漕ぎポンプであつた。同じ井戸でもポンプでは、「若水」の儀礼に馴染まなかつたのであろうか?

◇平心庵日記は、前年の元旦も「若水をくみ 洗面」を記している。平心庵宅は釣瓶井戸だったのか? 茶道家ゆえに伝承されていたのだろうか?

ゆつたりとした時の流れの中に、新年を迎えた慶びが伝わる。正月に限らず、季節の移りを忘れていた生活を教えられる。

酒匂史談 ⑬

かわせ はやお
川瀬 速雄

9 法船寺 酒匂二ノ

三五ノ二一

日蓮宗濟渡山法船寺。

法船寺濟渡山と号す。鎌倉

倉比企谷妙本寺末。『新編

相模国風土記稿』(以下

『風土記稿』と略す)。

『寺伝』によれば、文永

十一年(二五三)五月十二日、

日蓮鎌倉より身延山に赴

く時、当所を經歷ありし

に、修験者飯山法船とい

う者、帰依の余り日蓮を

我家に寓宿せしむ。後、

宅地を捨て寺となす。越

中阿闍利朗慶、開山第一

祖。開基は法船夫妻。法
船、正応元年(二六〇)五月
十三日死去、濟渡法船と
号す。妻同二年(二六二)九
月十二日死去、濟安妙船
と号すと書かれていた。

一方『法船寺縁起』に

は、日蓮上人が鎌倉より

身延山に赴く折、酒匂の

辺りで大雨にあい川が増

水、泊まる所もなく難渉

していた時、地藏堂の松

に龍燈が灯った。堂守の

飯山入道夫妻が、地藏尊

の手引きだからと招き入

れ心より接待し、その上

日蓮の化導を受け、法華

経信仰に改宗した。翌日、
竹ノ下へ向かう一行のた
めに船を出した。それら
の法舟に対して入道夫妻
は濟渡法船、蓮慶妙船の
法号を授与された、とあ
る。ちなみにこの宗祖の

書は、現在、鴨宮飯山家

に保存されている。

、本尊三寶祖師、後に龍

燈の松にて、日法上人が

刻し、日朗上人が開眼。

その弟子の越中阿闍梨朗

慶が飯山入道の法号を

とつて、濟渡山法船寺と

して寺院をなした。他に、

日蓮上人坐像底部「墨書

銘」、持物「經典全書」、

天保十三年(二八三)の書写

がある。日蓮上人の木造

に年記はないが、作風よ

り室町時代のもものと

思われる。

境内に龍灯松と稱

する老樹がある(囲

一丈四、五尺)。現在

の松は三代目であ

る。

明治初期、明治三

十六年(二八三)当寺四

十四世日透上人の法

弟子五名と、俗弟子

八名の名を刻んだ筆

塚がある。

昭和三十七年(二九

三、当寺住職和田行妙師、

和田妙尚師の発願によ

り、境内にお手引き地藏

堂が建立され、毎年母の
日に祭典が行われてい
る。

昭和五十三年(二七〇)鑄

造の大吊鐘、鐘樓が建立

された。

昭和六十三年(二九〇)小

田原市城山の大森城本丸

跡より、文龜三年(二五三)三

月十七日卒の大森藤頼公

之墓を境内に移し祀って

いる。

平成元年(二九二)建立の

小型の五重の塔がある。

10 大経寺 酒匂二ノ

三七ノ六

浄土宗 願力山功德院

大経寺。『風土記稿』に「大

経寺願力山功德院と号

す、本尊三尊弥陀を置く、

開山念譽、天正元年(二五

三)十一月十九日卒、永祿

三年(二六〇)海光上人創立、

とある。木造阿弥陀三尊

像の観音像底部に「墨書

銘」があり、「勢至像膝部

陰刻銘」がある。

地藏堂があったが関東

大震災で倒壊、現在堂は

なく、境内に六地藏尊を

元祿五年(二九二)松尾芭
蕉(四十九歳)の句碑があ
る。

人もみぬ春や鏡の

うらの梅

11 法久寺 酒匂

日蓮宗 歡喜山法久

寺。法久寺歡喜山と号す。

下總国中山法華寺末、開

山日能、本尊山宝祖師

(『風土記稿』)。

寛文六年(二六六)十月、酒

匂川に例年通り仮橋を架

け、二カ所の内酒匂寄り

の橋(八十六間)を法久橋

と命名した。

法と云ふ字は、シハ

水で、去はさる。即ち、

法久寺は「水を久しく去

る」と云ふ嘉字によるも

のである。

伝話によれば、文化十

一年(二八四)酒匂川の吉田

鳥千巻土手(九十間堤)修

堰に、藩主より堤の守り

仏として移転を命ぜられ

た。今、同堤上に堂宇が

あり、吉田鳥土手のお祖

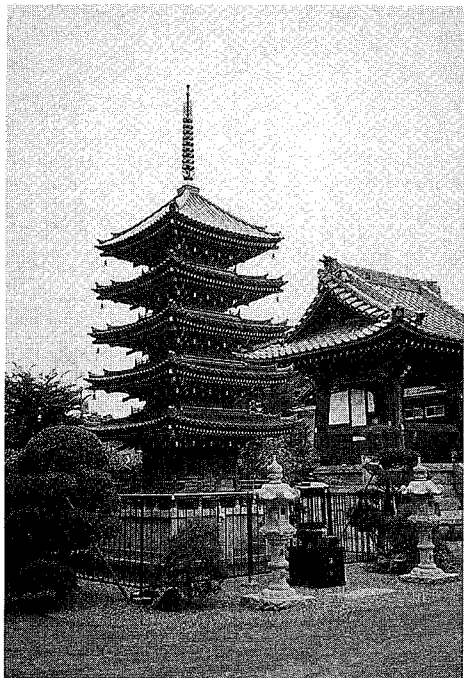
師様とあがめられ、水神

様、お稻荷様も併せ祀つ

ている。千葉山蓮華寺別

院(今、日蓮宗吉田鳥教会

末



▲五重の塔と鐘楼

主大久保忠真公にして、文化十年(二八三)の創立である。城主大久保忠真公は、年々水害を除かんが為に吉田島九十間堤に堂宇を建立、千代蓮華寺第三十八世領院日善上人が水神を勧請した。また城主より土手の鎮護のため永代祈禱を仰せ付けられた。堂地二十坪とある。この堂宇のお祖師様が法久寺の三宝祖師様で、法久寺は廃寺となったと思われる。

明治十八年(二八五)明治政府の命により編纂された『皇国地誌』には、境内東西九間三分三厘、南北六間、面積五十六坪とある。思うに、法久寺は地続きの法善寺持の堂宇ではなからうか。法久寺の檀徒であったと云う人はおらず、五十六坪の土地では墓地もなかったろう。文化十一年廃寺となったとはいえず、直ちに堂宇を取壊したりはしなからうし、明治十八年の皇国地誌編纂者は、堂宇があるので、相模風土記稿を踏襲した誤りではなからうか。

古老の談話では大正初期、法善寺が焼失した。この時法久寺も焼け、焼け跡に小さなお堂があったが、大正十二年の大震災で倒壊し、以後完全に廃寺となったという。

吉田島在住の古老の話だと、昭和十年頃までは、十月十二日に酒匂から十数名の信者がお題目の太鼓を叩いて、土手のお祖師様にお参りに来たという。

日蓮宗蓮華寺の僧が開眼したと伝えられている「川丈六地藏」(大口、岩流瀬、吉田島、金手、多古、飯泉)は、地藏尊ではなく石仏のお祖師様であるのも、法久寺三宝祖師様の分身なのかも知れない。

12 不動院 酒匂三ノ八ノ十八

真言宗 大覚寺派。『風土記稿』に、「不動堂 南蔵寺持、此堂元禄十六年(二七三)地震にて破損、後再建に及ばず、除地ののみ」とある。

明治二十一年(二八六)成田山の行者、海老原得浄師が発願、中市場の南、字浜、南蔵寺の隣地に建

立した。(再建か)

本尊不動明王。水行堂、地藏堂がある。

明治三十五年(二九三)小田原大海嘯にて流失。翌年現在地に再建された。

十八 産業

酒匂住民の生計は古来より農耕と捕魚が主力で、中世に宿場、近世に川越利益が加わったが、なお農耕が主収入であった。江戸期に至り鍛冶物、物指、工芸が行なわれる様になった。

1 農業

既に前各項の所々で触れたように、統治者も村民も農耕に力を注ぎ、酒匂堰を始め各堰の開削、整備、新田の開拓に、たゆまぬ努力を重ねて来た。

明治に入って、名主鈴木新左衛門家治、二宮金次郎門弟酒井儀左衛門が中心になって、養蚕を普及させようとして、「養蚕新論」、「広益国産考」(共に我家に残存)等で研究し、上州の長谷部万作氏を招き奨励した。

大正末期頃より、酒匂に仮住する別荘の人々に影響され、果樹園、養魚、養鶏等新しい農業経営が試みられた。

果樹園は一反〜三反程度の試験的なもので、梨を山崎良平、佃亮二、鈴木鶴之助、川口今蔵、葡萄を山崎孫三郎、プラムを内田吉之助、桃を小野門次郎、柿を川瀬豊吉、養鶏を川瀬信吾、養鰻を星崎三郎、豚は各家で二〜三頭飼育していた。

昭和十八年(二九三)、第二次世界大戦の激化に伴ない、食料増産のため果樹園は水田、麦畑にするよう命ぜられ、又昭和十六年(二九二)大蔵省印刷局が農地五万坪を買収、住宅も急増して、今では専業農家は三〜四軒しかない。

2 醸造

醤油、味噌の醸造は江戸末期頃より、醤油川瀬重太郎の祖、味噌川瀬慶三の祖、が経営していたが、大正末期、両家とも廃業した。又各農家では自家用の味噌醤油を作っていた。又小幡の栗原酒店では酒造りをしてい

た。明治三十八年(二九五)七月、足柄上下郡の醤油醸造業者が、醸造の改良進歩を図るため組合を結成した。

3 漁業

往古より海ある所かならず捕魚者があり、農耕と共に漁業は二大産業であった。何時頃から漁業権が生じたのか不明であるが、酒匂村では江戸時代より、須藤家、石塚家、大木家が漁業権を持っていた。しかしいづれも持舟一〜二艘の小規模な漁業であった。

明治三十四年(二九二)小幡村の本多家、内田家の漁業権を川辺正之助が譲り受け、大規模な丸川漁場を設立、大正元年(一九一三)には定置型鱒大謀網を採用し、巨万の富を得ると共に、酒匂に丸川漁場あるを全国に知らしめた。(つづく)



文命西堤の謎を追う (その二)

内田 清

1、石灯籠は文命西堤宮だった

2、可笑しな『風土記稿』の絵

3、裏返しされた西堤碑を読む

(以上194号)

4、案内板の内容は不足でない

か

5、子育て地藏尊なのか

6、手洗い鉢の語るもの(以下

次号)

7、西堤の工事は誰が行ったか

8、災いを福に転じた人びと

9、桜堤より桃・梨堤に

4、案内板の内容は不足でない

か

文命社の玉垣と手洗鉢の間に、山北町教育委員会が立てた案内板がある。町の史跡、すなわち山北町の歴史上大事な事件や施設のあった所と認定されたからであろう。しかし、文命東堤は一九六六年に南足柄市教育委員会の指定史跡になっているが、文命西堤はいまだに指定史跡でない。このへんの疑問を持ちながら案内板の内容を検討してみよう。

まず、文面を挙げる。そして文中の論点に番号をつけ、私見

を略述させていただく。

文命西堤碑

酒匂川は、宝永四年(二七三)の富士山／大噴火による①降灰のため河床が埋まり、岩流瀬／大口付近は大水が出るたびに堤防が決壊し、／周辺の農民たちは甚大な被害を被った。

このため、荒川・多摩川の治水工事を手掛けた／川崎宿②名主田中丘隅は、幕府の命により享保十一年(二七三)荒れ果てた酒匂川の改修工事／の指揮にあたった。

丘隅は、③弁慶杵や蛇籠に石をつめ、その一つ／一つに僧侶が④陀羅尼経を読んでから川岸に積み／上げ、堤が完成するとその上に中国の水神である⑤禹王の廟を祀った。禹王の⑥別称が文命である／ことから「文命堤」と言われ、川の東西で西堤／(岩流瀬堤と東堤(大口堤)と呼ばれている。

この堤等の⑦完成により、酒匂川流域の村々は／次第に復興していった。

この碑は、丘隅が文命西堤の

完成を記念して／建立したもので、享保十一年丙午夏五月二十五／日武蔵國川崎 田中丘隅立。と刻されている。また、⑧文命堤の名については、東堤碑に詳／しく記されている。

平成六年九月

山北町教育委員会

① 降灰という認識は甘くないか。富士山噴火による火山灰が災害の原因とのことだろうが、火山灰は『日本国語大辞典』によると「径四ミ以下の溶岩の細粒や破片。火山塵」である。当地に降ったものは、黒い砂が主であり、二七もある軽石もある。古文書でも「砂降り・降り砂」等と書かれている。三百年後の現在の洪水でも流失して災害をもたらしている。

② 田中丘隅を現職の川崎宿名主のように記しているが、金手村名主が「河崎宿御本仁(陣屋之隠居田中休愚老」と書いている(酒井広三家享保十二年「諸事控帳」。十五年前の「正徳元年(二七二)五十才で名主・問屋役を猶子太郎左衛門に譲り、隠居して荻生狙徠らに入門」(『国史大辞典』)しているのだから、常識的にも誤りであろう。

③ 弁慶杵と蛇籠を単純に並記するのは認識が甘い。蛇籠で押えた牛類等による旧来の工法

で失敗を重ねた大口堤の、決壊箇所締切りのために発明されたのが、急流でも「根の掘る、に従って沈む故に流る、ことなし」という弁慶杵であるから、特記されるべき物であろう。

尤もこの発明を、田中の創案とする説がある(本多秀雄「酒匂川と田中丘隅の治績」『市史研究』しがらみ7)。しかしこれは一九三二年の真田秀吉「日本水制工論」以来、田中の妹の子で、文命堤工事で田中を支えた技術者集団の一人森田十郎衛門通定の発明とされている(楠善雄「森田通定『治水用弁』追補・改訂」『府中市立郷土館紀要』7号)。弁慶杵については次回で述べる。

④ 陀羅尼経を読んでから川岸に積み上げたというのも可笑しい。「弁慶土俵」の話や「陀羅尼加持」の話も『新編相模国風土記稿』の編者が加えた解説や挿話であり、両者共に東西の文命堤碑文のどこにも書かれていない。此等は文命堤の解説文であり、碑や文命社についての解説ではない。また法華経の第二六陀羅尼品の章を読むと言う儀式は、文禄二年(二五三)の大口築堤・水神勧請以来慣例の行事だった(蓮華寺文書)。

⑤ 禹王の廟(びよう)を祀ったとは何か。廟は御霊や社のことで、祀るとは「神としてあ

がめ、一定の場所に鎮め奉る」ことだから、易しく禹王の社を造った、**文命宮(社)**を建立したと書いていいことではないだろうか。

具体的に言えば、**文命東堤碑**文の「今、石を累(かさ)ね神座を堤上に設け」傍らの碑「石に勒(きざ)んで似て後世に詔(つげ)る」事である。即ち私たちが現在見ている**文命西堤宮**と**文命西堤碑**の形が**文命東堤社**(現福沢神社)の原形であり、**文命西堤社**であることにもはつきりふれてほしい。

⑥ **文命は禹王の別称ではない**。別称とは『広辞苑』によると「本名のほかの呼び名」であるが、『大漢和辞典』によると**文命は本名**である。

【擬文命】ウイ 夏の開國の君、**禹王**。似は姓、



▲(索石金) 禹夏

文命は名。黄帝の曾孫。父、蘇の後をうけて洪水を治め、司空となる。外に在ること十三年、九州を開き、地のよしあしを見て貢を定め、夏伯に封ぜられて伯禹といふ。後、舜の禪を受けて天子となり、在位八年、東に巡狩して會稽に崩す。

⑦ この堤等の完成とは何時のことか。完成とは「完全に

来上がること」だが、**文命堤関**連では、以下のように様々な説がある。

- (1) 11年4月説
 - ・水士大禹神祠**文命宮**出来る(銘文)
 - ・**文命東堤後碑**出来る(銘文)
 - ・(大口堤・岩流瀬堤) 完成4・5月の予定(文命東堤新旧両碑銘文) (開成町史) 年表
 - (2) 11年5月説
 - ・**文命堤修築**、堤上に**文命社**創建(南足柄市史) 年表ほか
 - (3) 11年5月25日説
 - ・**文命東堤**・**西堤碑**出来る(銘文)
 - (4) 11年6月説
 - ・大口堤が完成し、水神がニヶ所に祀られる(小田原市史) 年表
 - ・**文命西堤**を完成させる(山北町史) 近世資料編
 - (5) 11年6月19・20日説
 - ・普請所出来御受取(引渡し)に成る(小田原市史) 近世資料編1、「大井町史」通史編
 - (6) 12年5月説
 - ・川崎の**本陣田中丘隅**、**文命堤**を修築する(「まつだの歴史」年表)
 - ・田中丘隅、**文明堤**を修築する(「神奈川県史」年表)
- 以上十例を挙げたが、どれが正しいのであろうか。現代においての工事完成を具

体的手続きで捉えようと、請負業者から工事完成届けが出され、検査を行い、検査(合格)報告書が業者と発注者に提出された時点が完成で、金銭支払いや式典の日ではないそうである。

文命堤の場合は、(5) 11年6月19・20日の普請所受取(引渡し)が完成日であろう。もつとも資料の「近世小田原史稿本」が編纂物ではあるが現段階ではこの辺だろう。

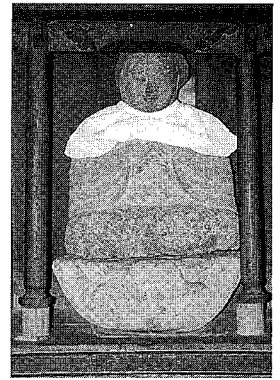
なお(6) 12年5月説の「神奈川県史」年表は「まつだの歴史」の年表を資料としているが、「まつだの歴史」が本文では11年5月説で叙述していることを読落としただけでなく、「文明」堤とするなど御粗末である。「年表」類にはこうした事務的誤りが潜んでいるので警戒したい。もつとも酒匂川災害を詳しく見ると享保11年5月の1、2日、20日、24日、さらに7月と四回の大水で普請場に被害があったので、享保12年閏1月から5月にかけて田中休愚による再度の酒匂川両岸治水工事が施工される(「大井町史」通史編)。

堤碑の案内板には詳しく書かれていないし、銘文を直接読むことは困難である。とすると、この文は蛇足である。「文命西堤碑」の案内板として、まだ書かなければならないことが残っているからでもある。

◆案内板に欠けているもの

- 表題「文命西堤碑」の案内板は、**文命堤**の史的背景や**文命堤**・禹王の廟等については述べているが、「**文命西堤碑**」については、21行中の3行分で建立年月日と建立者だけしか記していない。私は前回で碑文の要点を八項目に整理したが、二項目を満たすだけである。案内板は以下のような改善が望まれる。
- ① 官庫金二十両や桃・栗等を祭典資金とすること。
- ② 田中作の碑文を將軍吉宗の命で荻生狙来が添削したこと。
- ③ 「文命西堤碑」の裏面の文字が殆ど削られていること。
- ④ かなふり漢字が一語だけなので、小学生は勿論、大人でも読切れないということ。
- ⑤ 案内板を増やし、その物に即した的確で、平易で、特色を明記した解説文にすること。文命社(文命宮・文命西堤碑・手洗い鉢)、文命堤(堤・地藏堂・用水・橋)の二枚は必要だということ。
- ⑥ 図や絵を添えて読者の理解

を助け、問題意識を刺激するこ
と。



5、子育て地藏尊なのか

文命社の右隣、山北町岸字淵の上213番地に岩流瀬地藏堂がある。堂地約138㎡と共に、平成10年8月に真言宗東光院へ地権者七名から寄付された。地元生まれの念仏講中で、堂世話人の府川愛子さん(一九二四年生)によると岸斑目地区の念仏仲間も二人になり、堂の維持も出来なくなったので寄付し、念仏も湯坂地区でやって戴いている。昔から子育て地藏だったとのこと。

だが、堂内に掲げられている額の御詠歌は「ありがたや、ちかいかいもふかきぢうそん、岩流瀬に声もたへせぬ」である。

『新編相模国風土記稿』には「文命堤上にあり、村持ち」とある。

また嘉永二年(一八五二)には「地藏尊之儀者、田中丘隅様御建立二而、川丈六地藏と唱、大口、岩流瀬・吉田嶋・金手・多古・飯

泉右六ヶ所之分、大口二番千代村蓮華寺御開現(眼)被_レ成、右夫々々、御建被_レ成候儀ニ御座候事」とある(「南足柄市史」81-89)。他にも同様な記録があるので、酒匂川治水の要所守護の為に建立された「川丈(かわたけ)六地藏」の一つであろう。

この石造地藏菩薩座像の特色の第一は、「川丈六地藏」の最上流部、しかも酒匂川で最も決壊回数が多い堤防上にありながら、破損、風化が少ないこと、すなわち「川丈六地藏」の基準となる地藏像である可能性が大きいことである。「小田原市史」で「川丈六地藏」の祖師(日蓮)像説も述べられたりしているの
で、専門家による調査が望まれる。

特色の第二は、堂の位置選定が勝れ、かつ最大の堂内に安置されていることである。現在、他の「川丈六地藏」は、小さな石や木の祠入りか露座で風雨にさらされている。

以上のような次第で、岩流瀬地藏尊は、変遷があったとしても、文命堤や文命社と一体と見るのが正しい歴史観であろう。(つづく)

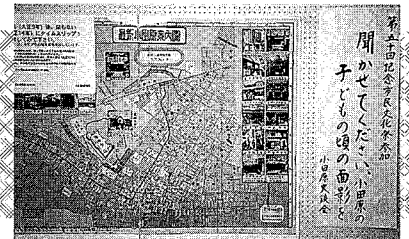
語り部の会

聞かせて下さい 小田原の子どもの 頃の面影を

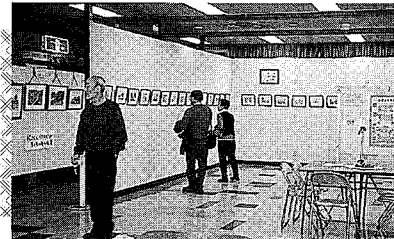
12月13日(土)〜14日(日)
小田原市民文化祭に参加
当会の企画展を実施

- 一、写真(市史編さん室・会員) 四二点
- 二、本のカット(高田掬泉) 二五二点
- 三、絵、子供の頃の風景 (昭和二年生れK氏) 四二点
- 四、絵、小田原の風景(宮部沙久弥) 三二点
- 五、御幸座の模型(曾我敏夫) 一点

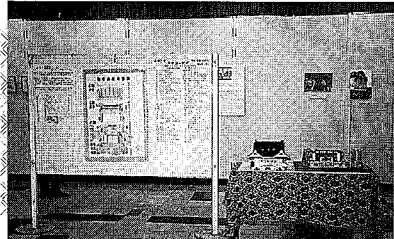
これらの作品を見て大正から昭和のはじめ頃を思い出し、語り合いました。二日で約二〇〇名の方がご来場下さいました。厚く御礼申し上げます。
なお、皆様方、御家族に所蔵されている懐かしい資料(写真など)ございましたら御提供下さいますようお願いいたします。



メインパネル、大正14年の小田原町地図



会場、市民会館2階小ホール



曾我氏提供の御幸座の模型と図面



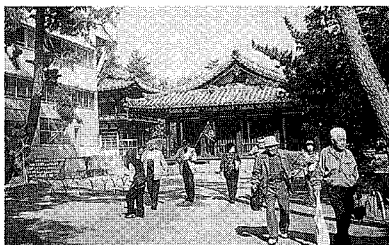
その後は各自で町中を散歩。買物を楽しむ。



午後は町の大半の民家が江戸時代の姿を残す今井町へ。全員で旧米谷家を見学。



昼食は“かしわら観光ホテル”で豪華に？



唐招提寺では解体中の金堂を見学。

午後二時集合。全員元気に帰路につく。(参加者氏名省略)

6日(木) 小田原駅前〜富士川SA〜東郷SA〜秋篠寺〜法華寺〜平城宮〜白鹿荘
7日(金) 旅館〜薬師寺〜唐招提寺〜かしわら観光ホテル〜今井町〜浜名湖SA〜富士川SA〜小田原駅前

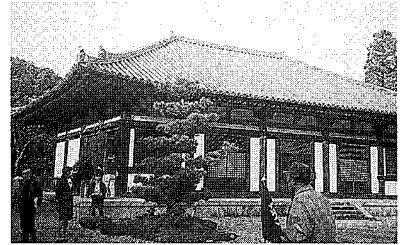
11月6日(木)〜7日(金)

奈良方面へ

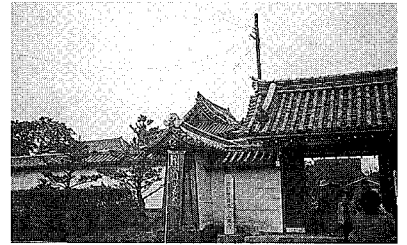
参加者33名

旅館“白鹿荘”へだいぶおそく到着。夕食後元気な会員は夜の興福寺付近を散歩。

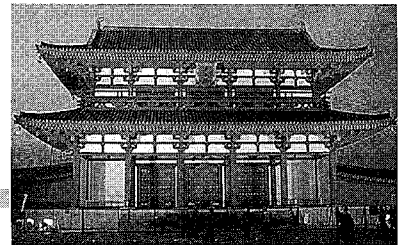
史跡めぐり



午前八時小田原駅出発 午後三時すぎ秋篠寺ようやく到着・見学。



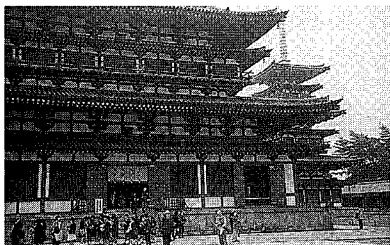
次いで法華寺へ ちょうど秋の特別開扉の日にあたり国宝木造十一面観音立像も拝観することができた。



暗くなった平城宮へライトアップされた朱雀門を見学。



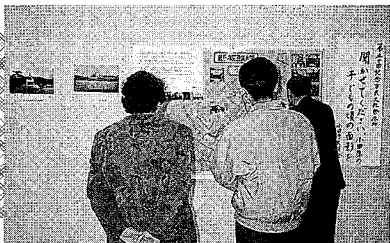
11月7日(金) 午前八時旅館出発。朝もやの中を薬師寺へ。



話上手な案内僧に時のたつのも忘れ、あわててまわる。



K氏 子供の頃の風景(昭和の初め頃)



昔の我が家を探す来場者



宮部沙久弥先生の作品(昭和の初め頃)

大雄山最乗寺

三門落慶法要に参席して

会長 小野意雄

大雄山最乗寺の三門落慶法要の御案内があり、参席させて頂いた。

日時 平成十五年十月二十七日
日程 午前九時受付
午前十時打ち出し

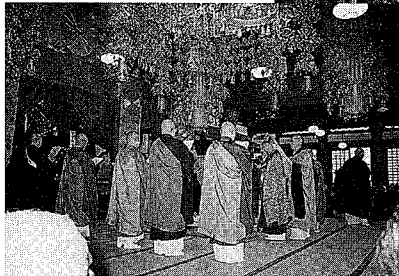
法要

- 一、入佛開眼供養(三門)
- 一、落慶法要(法堂)
- 一、経過報告 感謝状贈呈 祝辞祝電
- 一、祝 齋

▲落慶なった山門



▼真如臺での法要



御開山六百回大遠忌を平成二十二年に迎えるに当って前山主が発願され、現山主が引き継がれた事業ということだ。

九時に受付すると、もう多数の参会者が御見えだった。二階大食堂に案内され「打ち出し」を待ち、十時少し前に三門に参集した。

三門は、一番奥の茶屋のある広場から少し登った処に、建立されていた。広場から仰ぐ形。曹洞宗のこれだけ大きな法要に参席するのは初めてのことで、感銘深いものがあつた。

法要が終わってから、参加されたお坊さんにか配られていない『三門落慶式差定』という書面を分けて戴いたので、記録にもなるし参考に転載しておきたい。

〔十時打出〕

大梵鐘九声
安気地藏を導師一行出發行列(対法螺・對手磬) 三門到着

の段取り。三門の周りには、参席者で立錐の余地もなかった。

一、入佛開眼供養
導師は、三重県端光寺(前山主の住持寺)の住職余語道廣老師。

まず上香がされ、三門登壇(二階)に。点眼、如来十号、普同三拜、般若心経、回向、普同三拜と供養の儀があつた。

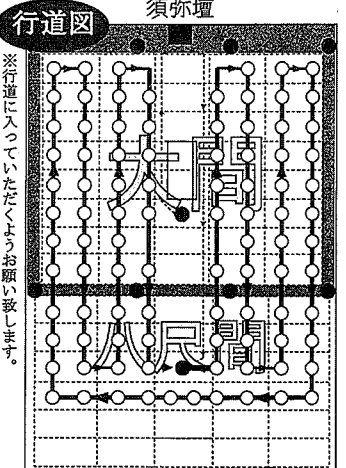
ついで、三門降壇。浄道場、拈香法語、普同三拜、般若心経三遍、消災呪三遍、随願速得陀羅尼二十一遍、回向、普同三拜と進み、門での供養が終わつた。

そして、行列が組まれ、上法堂。つまり一同、法堂に移動した。

一、落慶法要 真如臺
法要は、山主を導師として催された。殿鐘三会、大播上殿、拈香法語、献湯菓茶、普同三拜、普門品を誦経しながらの行道二

一、落慶法要 真如臺
法要は、山主を導師として催された。殿鐘三会、大播上殿、拈香法語、献湯菓茶、普同三拜、普門品を誦経しながらの行道二

須弥壇



※行道に入っていたくようお願ひ致します。
尚、大間から八尺間に掛けての八本引きとなります。

式典
一、祝 齋

御弁当で、参会者それぞれが大食堂でとることになっていた。ところで私事ですが、朝二階の大食堂に案内された。私の一番古い記憶は、夕暮れの山の中の二階で、これから食事が始まるうとする時、お寺の鐘がゴーンと鳴り響き、雪がちらちら降って来たシーン。四十代になつて、お袋に「これは」と聞くと、びっくりして、「お前が、半歳か一歳半の時に道了さんにおこもりしたが・・・」と言う。驚いたのは、大食堂の窓のデザイン。訪ねると部屋も昔と同じとのこと。記憶の面影通りだった。

小田原の人で会偶したのは、「丸う」の田代会長一人だった。

新刊紹介

○「足柄乃文化」第三十号(発行・山北町地方史研究会)

一、山北町地方史研究会と「足柄乃文化」の歩み(藤井良晃)

「足柄乃文化」三十号を一つの区切りとして、山北町地方史研究会の生い立ちから今日までを振り返っている。会の発足は一九五八年(昭和三十三年)。機関誌は「一般大衆を対象として余り肩の凝らないように、しかも権威あるものにした」というのがねらいであった。創刊号には「郷土史の愛着と学問」(永田衛吉)、「西丹沢堂山遺跡と尾崎遺跡を尋ねて」(赤星直忠)等が掲載されたことを始めとして、以後、当研究会の活動と町史編纂との連携のこと、往時の鉄道(東海道線)の変遷、丹沢湖に沈んだ集落、そして河村城等々、各号の特色を丹念に紹介している。

二、八幡神社と祭礼の今昔(石田公夫)
山北町岸の八幡神社の

祭礼を実際に支えてきた人が、振り返って戦前からの祭りの変遷をまとめている。内容は御輿の渡御・人形浄瑠璃・花車・お囃子等。お囃子については、盛衰あるなかで岸のお囃子が足柄囃子を受け継いできたこと、指導にも工夫を試みてきたこと等、詳しく記されている。

三、山北町の道祖神祭り(入江英弥)
清水地区の昭和初期の道祖神祭りの様子を聞き書きしたもの。ドンド焼きのときにセエノカミを火に入れて焼く風習があるか、一つ目小僧がセエノカミの帳面を預けていく話があるか、どのような唱えごとを言うのか等についても集落ごとに報告している。

四、別冊に「足柄乃文化掲載目録」(高村富士夫・武井宏仁)がある。これは今まで西さがみ地域の郷土史・地方史の機関誌にはない丁寧な総目録である。「各号別表題目録」「表題索引」「表題項目索引」「著者別目録」の四本建てになっている。なお、「表題項目索引」は、あ

る項目をさがしても見当たらず、後でこれが「表題の項目索引」であることに気付く。半端な印象を持った。

五、かなりレベルの高い機関誌であり、後日必ず役立つであろう内容が詰まっている。しかし、これを受け取った多くの会員がどこから読むのだろう、どのように読むのだろうかという想像してしまう。向かい合い、膝を突き合わせるせて出てくる山北の人たちの語り口のような文の一つも望むのは望外のことだろうか。(青木)

○「相之帳」第3号(発行・相之会 東 好一)
一、村筒(東 好一)
江戸時代、小田原藩に村筒があり、村足軽とも呼ばれ、武士でなく獵師でなく、藩から扶持米をもらう百姓であったという。その起源、呼称、待遇など、これまであまり調べられていなかった村筒を追っている。村筒とのかを「小田原領高ノ帳」などを引いて推理している。

寺(青木良一)

安叟宗楞は室町時代の人で、大雄山最乗寺第十世という。最乗寺は関東に曹洞宗を広めた拠点であり、安叟宗楞はその最乗寺に輪住制を始めて発展の基礎をつくった。小田原市では久野総世寺・早川海蔵寺の開山であるが、一般にはあまり知られていない。この人についての幾つかの伝説を探り上げながら話を進めている。

新会員

十五年度(2003)会員名簿を十月に配布しました

が、その後に入会された方々を紹介いたします。

清水 久子さん
南足柄市和田河原三八一
七三一―二二四八

一藤木久美子さん
中町一―一―一五〇五
二四―一五〇九四

鈴木 美伸さん
早川三―七―一九
二二―一九四八六

十二月現在の会員数
普通会員 四四七名
賛助会員 五四法人

総計 五〇一会員

落穂集

○ 巻頭、語り伝えて欲しくて、知る人も少なくなつた昔のお正月のことを書いて頂いた。餅といえば、今年の切り餅は何となく小さく、値段も一、五倍するとうい。冷夏の影響か。「餅なし正月」を体験した世代には一層敏感になる。

○ イラク戦争をはじめ、テロが毎日のように報道され、国内では、少年、幼児まで巻き込んだ凶悪犯罪があとを断たない。芸能番組やスポーツ番組がなかったら、テレビを見て笑つたり、手に汗を握つたりすることも無くなる。

○ こんな世相の中だからNHKの『プロジェクトX』やBSの『小津監督生誕百年記念の映画』などは忘れかけている道徳感、仕事に対する緊張感、情熱そして家族愛を思い起こさせる意義は大きい。




○ お茶の間へ千尋が送る春一番/絵日記の肌の日焼けの後が無い/せめてものゴジラがあげている国威/トラ年になつてしまったヒツジ年(よみうり)寸評から今年はこんなことが思い出として残つた。




どうぞ、良いお年をお迎え下さい。(編集者 植田博之)

特別賛助会員

謹賀新年

平成十六年 元旦
会員の皆様 本年もよろしくお願ひ申し上げます
会長 小野意雄

小田原  **秀秀のかまぼこ**
 辰寿堂スポーツ
 高木整形外科医院
 小田原城趾前田毎 打うどん 網元直営
 ぶる海宮
 スビリニ 宮
 茶半家具株式会社
 ちんぎう本店
 角田ガクフ子店
 東京電力(株)小田原支社
 トーホー建物 齧楼
 和菓子 菜の花店
 八小堂書
 八子マサ店
 平井書
 (有) 古屋花店
 株式会社 報徳
 建築金物(株)星崎仲吉商店
 家庭金物
 本多時計店
 栄町 松坂屋
 学生専科  丸マルク
 諸星運輸グループ
 曾我の梅干 嶺羊・かまぼこ 美の政
 みみづく幼稚園
 ヤオマサ株式会社

智恵袋 相田酒造店
 小田原銀座 アオキ画廊
 熱海 アオキクリニック
 飛多屋
 紳士服の アメリカヤ
 (株) アルファ
 伝統工芸 石川漆器(株)
 税理士 石原和夫事務所
 伊勢治書店
 自動車修理 板金塗装  I-MAN
 かまぼこ
 小田原ガス
 小田原報徳自動車
 株式会社 オートセンター・スギヤマ
 オリオン座
 かまぼこ 籠 清
 カネボウ株式会社小田原工場
 神尾食品工業 株式会社
 木地挽 日下部産業 株式会社
 かみやま小児科クリニック
 興電社
 小伊勢屋館
 小国府津
 (有) 小松石材店
 COMTEC コムテック株式会社
 さがみ信用金庫
 趣味のこふく さくらい
 箱根湯本温泉 春光荘
 雀のお宿

小田原史談(年四回発行)
創刊昭和三十六年一月

発行所

年會費 普通會員三千円
〇〇三〇二二六四三三六